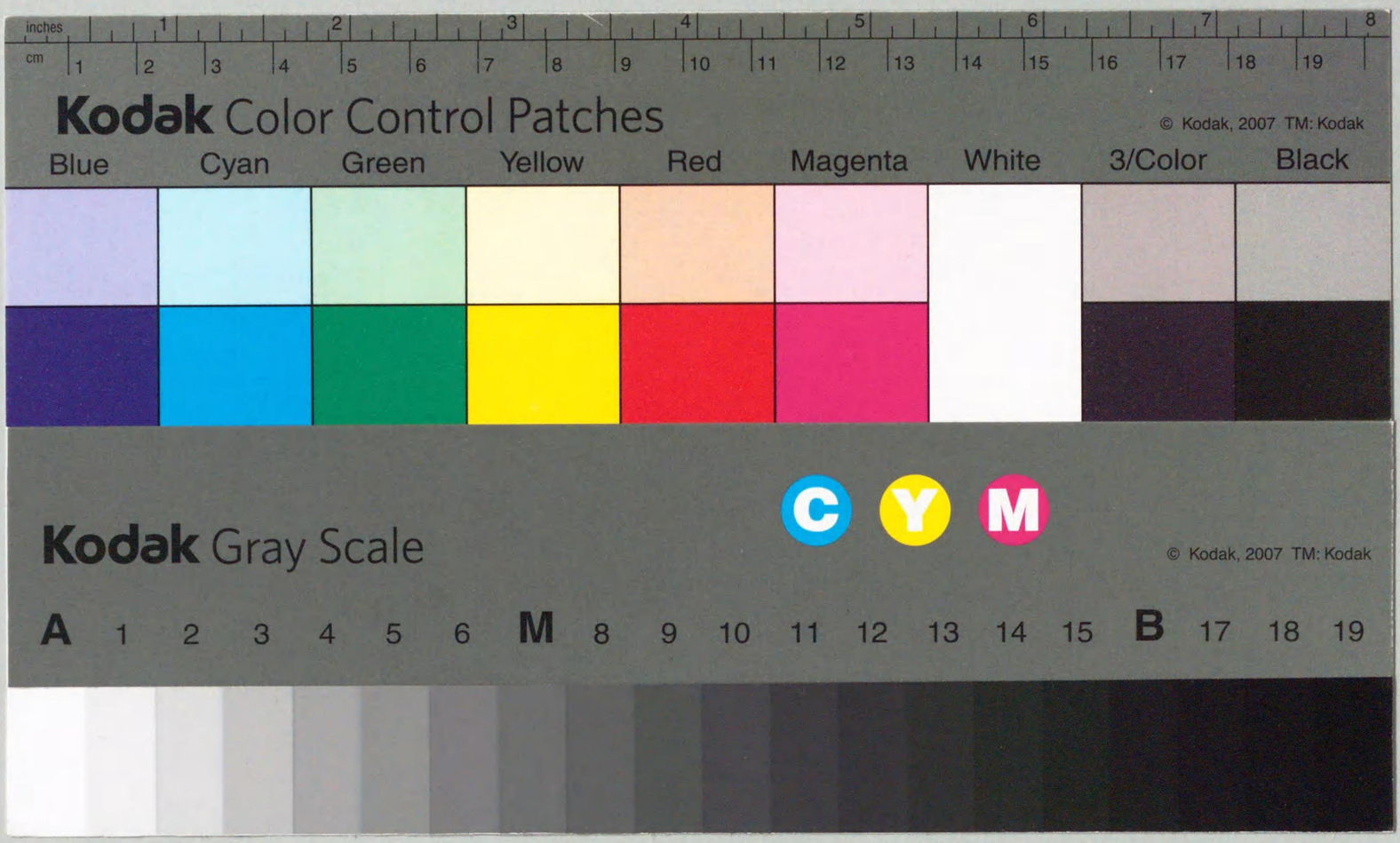

特46−74
1200500893153

少年教育
修身はなし
動物の巻

国立国会図書館

特46
74

動物の巻

少年教育
修身はなし

文廻家
主人編

265
711

特46
74

勅諭

朕惟フニ我ガ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我ガ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ國体ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己ヲ持シ博愛衆ニ及ボシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進ンデ公益ヲ廣メテ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重ジ國法ニ遵ヒ一

44.3.15
内交

御名御璽

旦緩急アレバ義勇公ニ奉ジ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ是ノ如キハ獨リ朕ガ忠良ノ臣民タルノミナラズ又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン斯ノ道ハ實ニ我ガ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スベキ所之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

少年教育 修身はなし

動物の巻

文廼家主人著

●蟹と犬との話

或日川邊に一疋の蟹歩み居たるを犬が見付け彼の蟹に云ひけるやう「凡そ世に生ある者は、何れも皆な正面に歩み得るに汝は如何なる不徳の生れなるや、正面に歩み得ずして、横に這ふとは、實に汝は不徳の生れなるかな、思ひば汝は氣

の毒なる者なりとて犬は頻りに蟹を輕んじ侮るにぞ、蟹は犬に向ッて云ひけるやう「我れ汝の正面に歩み得ずして、横這ふと雖も、亦た其進むことの早きに至りては凡そ世に生類多きが中にも、能く我れに及ぶべき者一も之ある無し汝若し我れの言ふことを疑はゞ、我れ汝と試みに駈け競べを致さん」と犬は之を聞き「如何にも駈け競べを試みん、俺れ何時でも好し、サア汝早く其支度をせよ」と云ひければ蟹は「我れも亦た何時でも好し、然れども今其駈け始むる前に當り、我れ汝に言ひ置くことあり、汝と我れと駈け競べをするには、此所より先き凡そ三丁を程度と定め又汝は我れより先き立ち汝の後足と我頭と次合ふ如く駢び居て、我れがイザ駈け出せと言ふたらば駈け始むることゝせよ」と犬は之を諾ひ尾を下げ蟹の駈け出せと言ふを待居たるに、蟹は私かに犬の尾先きを挟みて、サア駈け出さうと相圖をすれば、犬は蟹に負けじと駈け出し兼て定め置きし所に到り身を向き替て自分の駈け來し方を見るに蟹の姿の見へざるにぞ是れ看よと彼の横這ふ蟹の、達することゝ遅きを笑ひ居たるに、何ぞ計らん、蟹は其犬の後ろより「汝何ぞ此

所に達することの遅きや我れは先刻より此所に達して汝の來るを待居たり」と云へるに依り、茲に於て犬は曩に蟹に向ふて、不敬の言を吐きしことを詫入りしと云ふ

●蟻と蠅との話

蟻は夏熱い盛りの時候をも厭はずして　冬春の中食へ支ふる丈の食物を巣に運ぶ者なり然れば蠅が其状を視て蟻に云ひけるやう「蟻君〳〵　君は此熱さをも厭ひなく、能くソウ食物を運ぶことを、勉強さるゝことの感心さよ、君の如き勉強の出來さるをそ實に我れ〳〵の不幸なれ」と此言

を聽くや蟻は咳拂ひをしツゝ蠅に對ひ「何事も勉強しやう、と思ふて出來ぬものはなき筈なり然るを之が出來ぬと言ふは畢竟懶け怠る心あるに由るなり、箇樣に氣樂な了簡にて、其食ふをと も亦た氣樂に食ふて往ふと欲するは、是れ甚だ道理に合ぬをとに候はずや、俺等は此道理を信じて、少しも疑ふ所なきに依り、寒い冬中樂に食ふて暮さんと欲せば夏熱い時に苦しい思ひをして食物を運ばねばならぬことも、亦た是れ自然の道理に候はずや、俺等が勉強するのは、即ち自然の道理に從ふなり」と辯說滔〳〵と云ひし

かば、蠅は大に蟻の言葉に、感伏したりとかや

●鹿と狼と羊との話

鹿が羊の居る所へ來り「ナンと羊さん、四五日の間食物に困るから、小麥二三升貸して下さらんか、屹度約束の日迄に借を返すが先づ狼を受人に致しますゆえ、違約は決して爲ないから、安心して私の頼みを、諾て下さらないかと云ふ鹿の話を聞へた羊は、アッと驚いた顔にて折角の御頼みですけれども、狼が受人ぢや、マア其れは御免を蒙りませう、有りはしまいが若し吾子さんが約束通り返す期日を違ひなさッて受人の

狼へ掛合た所が、奴は容易に已ァの掛合位に、恐れる者ぢやありませんゆえ、御互に交違ひをしないうちに、御頼みのことは御免を蒙ッた方が、宜しうムります

●馬と馬丁との話

或官員の家の馬丁が、毎朝起きると厩へ到り、馬を沐浴させ、其躰の毛を櫛づりて主人に馬を美しく見することのみを勉め居たり、然るに其馬丁は馬の飼秣を時〳〵窃り持出して、之を賣り、自分の小遣錢とするを、馬も薄〳〵知り居れり、或朝の事なりしが例の如く馬丁は馬に沐

浴させ、其躰の毛を櫛づり始むるに、馬は疾より快からぬおとあるにぞ、馬丁に對ひ「お前さんは私に食ふ物も碌に與へもしないで、私の躰に毛並や体裁斗り能くせやうと、しなさツても、其れは不可ないゆえ、御止なさい、眞實私を美しく主人に見せて、お前さんが褒められやうと、思ひなさる積りなら、私へ食へ物を充分に與ひなさい」

猿の話

猿共相集りて庚申待をせし時に、親猿が一同に向ふて「汝等は何か藝盡しを仕て樂みては如何た

エ、併し例の通り、輕捷や木登りも古めかしいゆゑ、今夜は例とチト風の異ッた事を爲るが可いと云ふので、一疋の猿は兩手を以て自分の眼を塞ぎ見猿となり、一疋の猿は耳に手を當て聞猿となり、一疋の猿は口に手を當て言猿となる、茲に於て親猿は先づ見猿に向ひ汝が見猿になり し心は如何と問へば、見猿は眼は諸慾の、媒なり、他の金銀財産を見ては、貪慾の念を起し、他の美婦人を見ては、淫慾の念を起し、遂には不義不道の竇に陷りて、身を誤らぬ者とてはなきゆゑ、見猿となりたるなりと答ひければ、親

猿は又聞猿に向ひ汝が聞猿になりし心は如何と問へば聞猿は五音人の耳を聾すると老子の言の如く凡そ我れを褒る言を聞けば喜び、我れを譏る言を聞けば、我心に之を怒り、他を咎め人を恨み一朝の怒毒に依りて身を誤る事を免かれず、又他人の好き事を聞けば、其れを羨み、其れを嫉み、無根無形の聲の爲めに、惑はさるゝことを甚だ多し善悪是非の事を耳へ入れざるは、聞かぬに如くことなきを以て、聞猿となりしなりと答ひければ、親猿は言猿に向ひ、汝の言猿となりし心は如何と問ふに言猿は口は是れ禍ひの門

なり、舌は是れ身を斬の刀なり、他人の事を彼れ是れと悪様に話せば、其れが爲めに失敗ことあるを免かれず、銘し玉ひし三緘の旨にも、左ればこそ孔子は金人の背にられたり凡そ言を謹むことを第一とせたまとなきを以て、何事も云ぬに越し答ひたり、茲に於て親猿は、エヘンと咳一咳しツヽ、汝等の言ふ所は誠に世に處して、安全に幸福を得らるべき金言なりと雖も、未た全く金言の至極なるものとは申し難し、眼は物を見、耳は聲を聞き、口はものを言ふが、其職なれど

も、元來眼にて見るに非ず、耳にて聞くにあらず、口にて言ふに非ず、其見るべきもの聞くべきもの言ふべきものは、實に一心頭にあるものなれば汝等の如く我身の外にある眼耳口を塞ぎたりとて、内を守ることゝ充分ならざるを如何すべき、内を守ることゝ充分ならんと欲するも、外のみ守りさへすれば、亦た出來ぬことなり、内を守のなり、左れば汝等は自然に守ることの出來るもに見猿聞猿言猿を爲さしむるよりも、各自が一心頭に、見猿聞猿言猿を養ふまそ誠に肝要なら

ん、此の如くする時は、内の三猿が、外の眼耳口などの諸慾を防ぐべきが故に、我身の安全此上もなきことなるべし、と諭しけるに、三疋の猿共は言を、揃へて然う云ふ親猿殿は何猿になる御積りかと問しに、親猿の曰く、我れは何事をも不思猿になる心得なり、口は鼻のでとくにし、眼は耳の如くにし尻の如くせば、適として可ならざることなしと

鴉と蛇との話

一疋の飢たる鴉が、此所彼所と頻りに餌を探し廻ると、草蔭に蛇の蜿蜒り居るを見付しものか

ら、鴉は突然に其蛇を摑へ食んとしけるゆゑ、蛇は鴉の頸に捲付き、力の有らんかぎり締たるに、鴉は苦しき聲を出し乍らア〳〵悪いことを仕た、手出しさへ仕なかッたらば、斯ういふ苦しいめも仕ないで、善ッたらうに、ア〳〵止ば善ッたと後悔するを聞き、蛇は今になりて後悔するとも遅い〳〵ソレはゞ苦しい思ひをしたり、後悔をしたりする位ならば、ナゼ此已を摑み食ふと仕た汝の方から悪い事をするゆえ、苦いめにも逢ふのだ、チト其所を考ひてみろ此愚か者め

●虫と蝶との話

槐の木に多くの虫が集り遊び居る所へ、蝶が翩々と飛來りしゆえ、虫共は皆な蝶の異樣な風体を見て笑ひ乍ら蝶に向ひ「汝は何所の者ぞ、躰の色の白きは白粉にても塗り居るか、而して其躰の後ろを忙しく鼓くものは薄紙か何なるや」と尋ねしに蝶は虫に對し「我れは莊子が夢にみし蝶と云ふ者なり汝等は我躰の色の白きを笑ひぞも我れは却て汝の躰の色の青きを笑ふに堪へず、左り乍ら汝等は能く考ひみよ、汝等の青きも我白きも、自身の爲せるものにはあらず、是れ皆な造化の仕業なれば、其間に於て何ぞ是非すべ

けんや、夫の訓狐といふ鳥は、夜る微塵の虫をも見付れども、晝は大山をも見ること能はず、虱は手の掌にて聞き牛は角にて聞き馬は鼻にて物を言ひ、蟻は倒に行き蠅は天井に仰いて棲むは、是れ皆な造化の仕業にして何ぞ是非の爭ひをすべけんや汝等の我れを笑ふは實に愚かな了簡なり汝等は巳が躰の青色なるを常と思ひ我躰の白色なるを異樣の風体と思ふに依りて我れを非とし巳れを是とするを以て髭の虱結を誹ると同じ又汝等は我れを見て笑ひども、是れ尚は髪の延〳〵した凡そ世に巳が長じたるを以て人

の短を議するは、大壺の中の空を以て盃の中の空を笑ふに均しきものなり、智慧を以て愚癡を証するは、器械人形を以て、泥木想像の無機を悲むと均しきものなり、故に聖人は我を非とする者あれども、其非を容れず、我れを是とする者あれども、其是を入れず、萬物を押並て以て齊しきものとするを云ふが、汝等もナト聖人の教を聞が宜しからんと最と念頃に諭しけるに、虫共も大に蝶の言ふことに感伏したりと云ふ

●蝙蝠と鼬との話

蝙蝠が誤りて地上へ落けるに鼬の爲めに捕へら

れたり左れば蝙蝠は大きい聲を出し、御助け被下い、御助け被下いと云ふを、鼬は諾はで、我れは汝等鳥類の讐敵た、如何して、汝を助ける事が、出來るものかと云へば蝙蝠は私は鳥類の中では有りません鼠の先祖でムりますと云ひけるにぞ、鼬は其蝙蝠を放ち遣れり然るに後ち件んの蝙蝠は他の鼬に攫へられしゆゑ、御助け被下い御助けと泣叫びしに其鼬は吾は鼠の先祖たる汝の如き者とは大敵たから如何して汝を助ける譯に往ものか、と云ふ案外の言葉に、蝙蝠も是れはしたりと思ひしが、何食ぬ顔で私

は鼠の先祖ぢや有りません、蝙蝠でムります、と答ひけるに鼬はウン、ン蝙蝠とあれば鼠の先祖よりも尚は優ツた吾の大敵た汝能く覺悟を仕ろと云ひツゝ鼬は其蝙蝠を食へ殺して仕舞しと云ふ是れ嘘をすれば其命をも亡ふに至るの証據とすべく又以て嘘を言ふことは深く誡むべきなり

●鯛と鮑との話

鯛鮑に向ふて「斯る目出度御代に生れあひ互に樂むべき事乍ら、我れ等は動もすれば、針綱にかゝり、卒爾に命を失ふまとこそ愚かなれ、針は餌に隱れ、我見誤るに由るものなれば恨なしと雖

も、世に唯だ恨しきは網なり、我れ等、快よく游び居る所を思はず引上らるゝ事の悲しさよ凡そ世に活とし生る者、誰が其命を惜ぬ者やある我れ等が命惜ければ、人間と雖も、亦た同じく命惜きに相違なし然るに彼れは針網を以て、漫りに我れ等の命を取りて、以て之を食物と爲すは、實に其爲すことの殘酷なること道義感情の何たることを知れる人間の所爲とは思はれざる程なり、去り乍ら、今斯く愚痴を言ふてみた所が、我れ等の力では如何とも致し方なければ、寧そ人間の殺生を止るやうに、龍宮へ請願せん

と思ふが汝等は之を賛成せざるや否や」と云ひは鮑は鯛に答ふる「此世は優勝劣敗とて強い者が勝ち弱い者の負るは當然の道理なれども此道理を知らずに、貴殿の如く愚痴を言れた所が、其れで肝腎の命を守れるものにあらず、苟くも命を惜み之を守らんと欲せば、則ち危きに近づかざるにあるなり、私共は毎に命を惜み之を守るの念深きを以て危きに近づくことなく、岩の佶倔し所に取付き居るが故に容易に人間の獲物となるの心配なし貴殿も亦た今より私の申せし通りにし王はゞ決して人間に命を取去られ王ふ心配

は之なからん、何ぞ亦た人間の殺生を止しむる請願を、龍宮へ差出すの頻はしき事を爲すに及ぶべき」と語たれば鯛は鮑の智言に服せしとかや

虱と蚤との話

虱等大勢にて蚤の住家へ押行き云へけるやう我れ〳〵は久しく貧乏人の襤褸衣服の中に住み、氣樂に暮し居る所へ、昨夜汝の一族共我〳〵の住家へ不遠慮にも來て貧乏人の太股を食ひしを以て彼れは大に怒りて身を隱せしゆえ貧乏人に、汝等は早く飛去りて身を隱せしゆえ貧乏人は我れ〳〵の所爲と見認め、其れが爲めに我一族中には彼れの手にて捫殺さるゝ者さへありたり我れ〳〵は常に汝等の爲めに横難を受ることは屢〳〵なるが實に汝等は不届な奴なり依りて我れ〳〵は此事を千手觀音へ申上て屹度汝等を糺明して貰はんと思ふが然れども若し汝等今より心を改め我れ〳〵の住家へ來らぬことゝ致すならば我れも亦勘辨せぬこともなし麼も汝等の考ひは如何」と玆に於て蚤は、虱よ〳〵其方は頻りに吾等を怨めども昨夜貧乏人の股を食ひしは吾等の仲間にあらず、却て其方の一族なるべければ、吾等にソンな難題を云ふよりも、先づ其方

の一族を詮議せよ元來其方等も吾等も人間の血を啜て命を養ふ所は相同じと雖も吾等は其足ることを知りて飽まで血を啜ざるを以て害に遭ことも亦た隨つて少なきなり然るに其方等は足り飽ことを知らず食た上にも食ひ腹は充ちて膝を過ぎ脹膨て歩むことの出來ぬまで、人の躰に食付き剩さへ人を見ても逃隱れもせぬゆえ、人の爪尖にかゝりて捫殺さるゝに至るものなるに、其方は之を思はず却て吾を怨むは誠に間違ッた了簡なり」と互に負じと云ひ爭ふ折節、忽然とし て翼を鼓し一疋の虫が飛來りて云へるやう「我れ

は夏國に住む蚊といふ者なり、汝等何をか爭ひ居るや、一寸此場を見受た所の樣子では、汝等が血食する領分の爭ひと知られたり、依りて拙者は汝等に語りて聞かすべき事こそあれ、塵世間の事は何事も十分我思ふ儘には成らぬものにて其十分を冀ふは足ることを知らざる心病と申すべし、汝等の互に血食の領分を爭ふのも、亦た貪る心克ちて足ることを知らざるに由るものなれば、人の爪尖にて捫殺さるゝに至るも亦た是れ自業自得なり、何者にか其咎を歸すべけんや、拙者なぞは濠溪の子子の變化にして、糞鋭

く翼ありて飛行自在なるが故に、汝等の如く人の手に殺さる憂へはなしと雖も唯た命の短きは如何にも歎はしく思ふなり汝等は春夏秋冬の四季共に、其生を失はず、是れ命の長き所以なれども、拙者の如きは、僅に夏秋を知るのみにして冬春を知らず之を以て其命の短きことを知るべし、然れども世間の習ひとして、富貴な人の短命貧賤な者の長命は是れ常に有り勝ちの事なり、天は西北に足らず、地は東南に満ずと言ふことあれば、天地すら尚は十分ならぬものと知られたり、愚ふて茲に至れば、唯た自然の性に

従ふより外に策なし、又何をか怨み、何をか争ふことあるべきぞと、最と道理を懇〳〵と説き諭したれば、虱や蚤も大に蚊の説諭に感服せし

と云ふ

●蜂と蟋蟀との話

時将に冬に向はんとす、蟋蟀の凍餒に迫るものあり、一日食料を備へたる蜂巣に至り、乞ふて曰く、願はくは蜜汁二三滴を恵み以て余が窮を救はれんことを、蜂進みて問ふて曰く、子は盛夏の間、何事を爲したるか、何ぞ余輩の如く、食料を貯蔵せざるか、と蟋蟀答へて曰く、子の

間ひ實に利あり、余は飲酒歌舞以て徒に時日を費し、更に意を禦冬の事に注がざりしなりと蜂曰く余輩の生計と大いに子と異なり、余輩は豫め四季の相交換するを考へ夏時には勉めて食料を蓄積し以て他時の用に備ふるなり、若し子の如く飲酒歌舞に耽けり更に餘事を慮らざることは嚴冬に至り凍餒に迫るは固より其所なりと云へば、蟋蟀默々として退けり

●鳩と人との話

或觀音堂へ參詣の爲めに來れる人ありけるが、該觀音堂の前に十七八羽の鳩が、人の來るをも

恐ずして地上に落たる餌物を食ひ居りしかば、件んの參詣人は、遂に一羽の鳩の尾を踏みたり此時鳩は「何所の何誰か存じませんが、チト道を御歩行なさるには、御氣を付なさいませ」と云ひも終らざるに、件んの參詣人は「ソレハ乃公の方へ言ふことぢやない、汝の方に言ふまとぢや、乃公が向ふから歩行て來ると知ッたならば踏れないやうに、汝はナゼ傍へ寄らないのぢや、其傍へ寄るべきを寄るも仕ないで、唯た慾深く餌を食ふことに、心を奪れて居るから、尾を踏れたものゆゑ、汝まそ以後は能く氣自業自得と云ふも

を付るが可い」と申せしに鳩は笑ひ乍ら「へゝエソンな理屈を貴下が仰やいましても不可ません、私は高の知れた鳥で貴下よりは極劣等の動物です、然るに貴下は万物の霊長とも稱さるゝ、私なぞよりは極優等の動物であらせられ乍ら、私の快よくコボレ餌を拾ふて食へ居る所を足に踏みて御通りなさることを思ひば、古人の所謂見れども見えずとは、貴下の事でありませう、天禀微妙の官能を御具へなされても、見れども見えずと云ふ塩梅じや尊い天禀の眼を、木の節穴の様にして入ツしやる、イヤサ石か瓦の様にし

て、御仕舞なさツたのでムります、夫ゆゑ御氣を付なさいと申した、のに然う御怒りなさらんでも、可いぢやありませんか」と云れて件んの參詣人は、大に顔を赧らめ、更に返す言葉は出ざりしとぞ

狐と鶏との話

或時狐ゑじきをもとめかね此處彼處を、さまよう所に鶏ゆきあひたりゑたりやかしこしと是を取て食はんとす、鶏この事を悟りて、ある木の枝に飛びあがりぬ、狐手を失しなふて、詮方なきにしよせん鶏を騙らかしてこそ食めと思ひて

かの木のもとに立寄て、いかに鶏聞しめせ、このでろ萬の鳥獣の中なをりをするとあり、御鳥は知らせ給はぬかひさしく申し承たまはらぬによとて、わざとこそ是まで參りて候らへ、と最睦ましげに語りければ、鶏狐の武畧を悟りて誠にかゝるおりふしに生れあひぬる事こそ、めでたう候へ、善く遇たり犬能やうにはからひ給ふべしといひてさらにおりず狐かさねて申しけるは、まづこの所におりさせ給へ、私に申すべき事ありと頻りによべども遂に下ず、鶏用ありさうに彼方を眺めければ狐下より見あげて御邊は

何事を見たまふぞと申しければ、さればとや、たゞ今御邊の御ものがたりし給ふ事をつげしらせんとや思はれけん犬二疋はせ來り候と申しけれは狐遽て騒ひでさらば先づ某は、御いとま申すとて、去んとす、鶏申しけるは、いかに狐鳥獣の中なをりしける折ふし何事かは候ふべき、そこにまちて犬と交りたまへと支へければ、狐かさねて申すやう、若し彼の犬中なをりでとしらずば、我爲に悪かりなんとて、にげさりぬ、そのでとく、たとひ人我れに仇を爲べきものと悟るとも仇をもつて向ふべからず、彼れが武略

にて向はゞ我れも武略をもつて退くべし

猿と犬との話

ある雌猿一度に二子を、うみけり、左れば我胎内より同じ子を産ながら一つをば、ふかくあいし、一つをば疎かにす彼のにくまれ子いかんとも、せんかたなくて、月日を送れり我愛する子をば前にいたき、悪む子をば、脊中にをけり、ある時うしろより、たけき犬きたるとあり「この猿遽て騒いでにぐるはぞに、抱く子を、かたわきに挟みて、はしるはぞに、すみやかに行ことなし、しきりにかの犬近付ければ先づ命をたす

からむとかたてにて、脇ばさみたる子を棄て、逃のびけり、故に脇にくみて脊中にをける悪れ子はつゝがもなく取つき來れりかの寵愛せし子は犬にくひころされぬ、いくたび悔めども甲斐なきによつて、つるにかのにくみける子を、おはしたてゝまへの子のでとくに寵愛せり其でとく人としてもいまだ迄むつぶも只この猿の譬へに異ならず、まれによつて是を思へば、かれはよし、かれは悪しと、しなを撰ぶべからず、たれもひとしく思ふならば人亦た我を思ふべきなり、うたがひなし

●鼠と猫との話

大久保彦左衛門、或る時、仙臺侯の邸に謁る談偶ま左甚五郎の事に及び、仙臺侯甚五郎の作の鼠を出して之を示す、側に猫あり直に之を捉へ去る一座感賛す、大久保自若として曰く、是れ珍とするに足らず、余の家には此の如きもの數疋あり、と侯之を疑ひ、翌日大久保の邸に臨み之を見る、大久保即ち數疋の鼠を出す、側に數猫あり爭ふて嚙へ去る、何ぞ圖らん此の鼠は鰹節にて作りしものなりしと

●蠅と蟻との話

或時蠅蟻に向て誇りけるは、如何に蟻殿謹んで承まはれ、我はや果報いみじきものは世にあるまじ、其故に天道に奉り、或は國王に備えるもの、我さき嘗め試む、加之ならず百官卿相の頂きをも恐れずはしいまゝに飛上り候和殿等が有様は天晴つたなきありさまぞと笑ひ侍りき、蟻答へていふ、尤も御邊は左樣にこそめでたく渡らせたまへたゞし世にきたし候は御邊はや人に嫌らるゝ者なし左らばかうはひそなぞのやうに、甲斐〳〵しく仇をもなさで動もすれば人に殺さる加之のみならず春すぎ夏さりて、秋風立

ちぬるこそ、漸く翼をたゝき、頭を撫で手をするさまなり、秋ふかくなるに従つて翼より腰ぬけて、い。と見ぐるしきさまとぞ申し傳へける、我身は拙きものなれども、夢に春の移るをも知らず、豊にくらし侍るなり、猥に人を侮りたまふものかなと恥しめられて立ちさりぬ、そのでとく聊か我身に業あればとて猥りに人を侮る時はかれ又已を侮るものなり

●鷲と鴉との話

鷲が餌食の爲めに羊の子を攫み取り、食ふ所を鴉が見付け、アナ羨しきことよな、何れも鳥の

身として、何故か彼れ鷲と我れと異なる所あるべきぞ、と我慢を起し、野牛の居るを見付て、攫みかゝりしに、却つて其鴉は脛を纏ひて、羽撲く所を野牛の飼主走り出で、件んの鴉を取押へ羽を打切て放したるに、其近所の子供等は、件んの鴉を見て、汝は何と云ふ鳥なりやと尋ねたれば、鴉は昨日は鷲今日は鴉なりと答へたり其如く自分の身の程を知らずして他人の、才能力量を羨む者は鷲の眞似をしたる鴉と同じき者なり

●狼と羊との話

一匹の狼が小流の畔に於て、飲食なさんとせしとき、路頭に迷ひし一匹の小羊が誤つて小流に墮落し既に上流より下り遙か向ふの方へ泳ぎ行きつゝありしかば、狼は彼の羊を攫み食はんとの念生じ忽ち羊を呼び疾聲にて、野郎汝は不禮なる奴かな何故余が飲む處の水を濁らさんとするかと詰じれども、羊は更に怒る氣色なく先生の方へ流れ先生方より拙者方へ流れざるなりと云へば、狼は此一言に沈默せり雫時ありて狼の云へるよう「然らば他に又申し分あり、今より一年前に貴公、何故斯の奴と種々名を付け余を呼べりや、と詰問すれば羊は股栗しながら「君よ一年前なればそは余の生れざる前なりと云へば狼「然り若し貴公にあらざれば、必ず貴公の父ならん、左れば余に取りては同一の怨恨あるなりとて、遂に憐れなるかな小羊を寸斷せり

●鼠の集會

數十疋の鼠等相集りて協議しけるやう「何日でも我れ〳〵は、彼の猫と云ふ徒ら者に、捕へらるゝには困ッたものなり、彼れ猫の聲を立るか、然らずば足音を高くするなどせば、我れ〳〵も亦た用心の仕樣もあれども、窃かに覗はるゝゆ

ゐ、遂に油斷して、我れ〳〵は彼れに捕へられて、其餌食となるに至るものなるが、是れに付き如何か好い工夫はあるまいかと申せしに古鼠は、ソレには我れに好き考ひあり、其考ひとは先づ彼れ猫の首に鈴を附置事となさば、彼れの來ることは、能く我れ〳〵に知れること疑ひなし、汝等子鼠の内より誰か往て、猫の首へ鈴を附來れ」と云ひけるに滿座の鼠共は、其れは至極好い考ひなり、と賞贊はせしものゝ、誰一疋として猫の居る所に到り、鈴を附來らんと云ふ者なきを以て、遂に其會議は何の功もなくて終り

たり、其如く吾人の唯た口先きで豪膽らしきことを言ふも、之を實地に行ひ得ざれば、疊の上の空論なり、故に深く省みる所なくんばあるべからず

●鳩と鷲との話

鳩が常に鳶に輕蔑せらるゝを口惜く思ひ、或日鷲の許に行き申すやう鳶と云ふ下賤の者私共を侮り、動すれば私共を、已が餌食となさんと致しますゆえ、貴下の御保護を以て、今より後ち彼れ鳶が私等に不埒な擧動を、致さない樣に成下され候はゞ、私等は貴下を主君と仰ぎ奉らん」

と頼みしが、鷲は心善く之を諾ひ「兎に角外に一同へ言ひ聞かすこともあるゆえ、一同打揃ふて我許に来れと申しけり左れば其言に随ひ鳩は皆な相揃ふて、鷲の所に到りしに、鷲は鳩共を片端より殺したり、其後に残りし一疋の鳩の申しけるには是れ鷲の仕業にあらず我れと我危きに近づきし過ちなり、凡そ何事も深く心に考て、他に之を相談せざれば、箇様な過ちも出来るものぞを、他に知らしめの為めに、鷲殿は斯く我一族の者を、騙し殺しにせられたものと相見へたり、鷲殿の計ひ尤も至極に存じらる」と稱えし

とかや

●狐と鶴との話

鶴が何やら食ふて居るを、狐が見付けしかば、狐は鶴を誑して其食物を奪んと欲し、狐は鶴の居る所へ到りしに、其食へ居る物は格別の好物にも、あらざりしゆえ、狐は鶴に「鶴殿〳〵御邊は、ソンな旨くない物を食ふて居らるるならば、我宅へ来たまへ、吃驚するほど旨い物を振舞ひ申さんと最も親切な言葉に随ひ、鶴は狐の宅に行きしに狐は奥より粥の如き物を、淺き鉢に入れて持出で鶴に對ひ「御邊は堅い物を御嫌ひの様

子なれば、態と箇様な物を差上る譯なり」と云ひッヽ、其鉢を鶴の前に置きたるに依りて、鶴は長き嘴にて食んと欲するも、亦た意の如くならざれば、狐は其体を見て、御邊は未た斯る旨い物を御食べなさッた事がないと見える、サテ〳〵世間見ずの御方かな、此食物は是れコウして、食ふものでムる」と云ふて鶴に食せんとて出したる物を、皆な食ふて仕舞たり、鶴は狐に嘲哢されたるを無念に思ひ、如何にもして此無念を晴さんと心に按ずるも、表へは其様子を少しも顯はさず、体よく狐の前に禮を云ふて歸りし後ち

鶴は一計を考へ出し狐の所に行きて「珍らしい物を整へしかば君を招き申して御馳走せんと欲すれば是非只今より拙宅へ御出下され度と云ふに依り狐は左る者ゆゑ早くも是れは先頃の返報かと思ひたれども其事は色にも」出さず鶴の宅へと行きけるに「鶴は細長き入れ物へ匂ひ好き物を盛りて狐の前へ差出したれば狐は其匂ひの好いのに氣を奪れ早く食んものと欲すれども其入れ物が入れ物ゆゑ食ふこと叶はぬを鶴は見て「サテ〳〵君は馬鹿な獸かな物を食ふ時に焦息て猥りに躰を動かすは無禮でムらぬかソレは先づ斯うして

食ふべきものでムるとて狐に差出せる入れ物を取上げ長い嘴を延しツ、食ふて示しければ狐は大に顔を赤らめてコソ〳〵と歸り去れり吾人相互の間も亦た此の如く、漫りに我れ他人を侮れは、他人も亦た我れを侮るべく、我れ他人を敬へは他人も亦た我れを敬ふべし、左れは何程他人より侮り辱しめらるゝとも我れは之を氣にかけず却て其人を重く敬ふべし、是れ人間の一大美徳にして此美徳の力は如何なる傲慢疎暴の人と雖も、亦終に制伏せしめらるゝに至る者なり

雀と人間との話

或人我住宅の近傍に、一神社の森あり、常に數多の雀が、チウ〳〵し居るにぞ之を指ん爲めに竿の先きに黏を附け、雀止り居る所を覗ふて竿を向たるに雀は其人に云ひけるやう「御身は貴き人間と生れ乍ら、私の如き小鳥を捕べなされたれはとて、何の益があるべきぞ、私の云ふことを御身能く之を守り玉はゞ、私は一生御身を利益する金言を申上ん、御身は之を聞く思召あらせらるゝや否や」と此雀の言ふことに件んの人も其金言を頻りに聞てみたくなりて之を雀に所望したるに、雀の云へる

には第一有るまじき事を有ると思召さるな、第二得がたきものを得たいと思召さるな、第三過ぎ去た事を後悔し玉ふな、以上の誡めは實に御身が一生の利益に、なるまと、存じて御話に及ぶ義なれば、決して之を疎かに思ひ玉ふまじく候へ」と語りて尚は私が是れまで御話に及びし廉〳〵、能く御分りに相成りしか」と念を押たるに件の人は委細分りたりと答へたり、左れば其雀はズット高き梢に翔上りしを其下より件んの人が視て又も彼の雀を指んと欲し竿を向け遣れば彼の雀は嘲笑ひッ、「サテも御身は愚かな人かな

私の今聞かせ參らせたまと早や忘れ玉ひしか左なくば何故に私の御話に及びし通りの行ひを成されぬや御身は私より御身の爲めになる話を聞き乍ら私を捕へやうに欲し玉ふは是れ私が御聞かせ申せし金言に背き又恩人に對して弓を引と同じき人非人の所爲に候はずやと詰りしに件んの人は閉口して一言も出ざりき

犬が牛肉を窃みたる話

犬が某牛肉屋の店先で肉の切を窃み、之を咬へた儘で小さな河を渡りかけたが、ふと下を見ると、水面に自分の影が歴々と寫りて居る故、自

分の影とは露知らず、さては此底にも巳と同様に、牛肉を咬へた、犬が居るな、一番此奴を威嚇して奪てやれと、悪心を起し、口を明けて其肉を巳に渡せと云はんとすると其口の明たはづみに自分の咬へて居た肉が河の中へ沈で仕舞ました、影に迷ふて實物を失ふは、濡手で粟を摑まんとする連中に、能くあるやつさ、

●兎と龜の話

或日兎が龜の短い足で、遅々歩くのを見て、大に嘲弄すると、龜が笑つて曰には、汝が何程迅速とも駈競では負やしないせと、兎は之を聞い

て、この奴なまいきなことをいふ、ぞふして巳れと競爭してかなふものかと或塲所に標木を建て、兩人一所に出立しましたが、兎は龜を侮り一向に遽もせず、路傍の草の上に睡眠せり、雲時して目を醒し見るに龜の姿の見へなくなつたので、誤たりと驚愕し、一生懸命に駈出し追付うとしたれども定めの塲所へいつて見れは、龜はさつき其處へ、到着して居りました

●狼と鶴の話

狼みが喉へ骨を立て、其痛みに堪へぬ故ヒヨイ〳〵跳廻り、誰でも此骨を抜て呉た者には、充

分の禮金を遣ると禽獸仲間へ言ひ觸すと、鶴が之を聞き禮金と言ふのに目が眩れ、巳が拔て遣ふと狼に口を明けさせ置き、長き口嘴を中へ突込んで其骨を喰へ、何の苦もなく拔てやり、サア是で何ふか約束の禮金を下さりませと、丁寧に言へば狼は齒を露出して大いに怒り、貴樣が今ま巳れの口へ頭を突込んで居た時、一思ひに嚙殺さずにおいて遣たのが此上もない褒美たのに、猶は其上に禮金を吳れとは、身の程知らぬ不屆者めが、後で禮金を貰んが爲に、人に善き事を仕て遣る者

は、得て惡い對手に掛、禮金の代に劍突を貰ふ者さ、

●彌陀如來の木像を載せたる馬の話

或祭禮の時彌陀如來の木像を、馬の背上に載せ市中を引て行くと、男女老幼皆集ひ來て隨喜の涙を流しつゝ有難いく〳〵と伏拜ば、馬は人々が自分を有難がりて拜む事たと思ひ、ズツト高く留り、足を踏〆たなり嚴格に身搆なし、一步も先へ進まざれば、馬丁は氣をいらち、鞭もて背上を痛く敲き、此畜生め皆樣の拜みなさるは、手前のことではない、手前の背上に居らつしやる、阿彌陀樣を拜むのだ、

兎角馬鹿な奴に限つて、他人から其役目柄を尊敬つて呉れるのを見て自分を尊敬て呉れるとおもひ違へ、乙に威張たがる、

●盗賊と犬の話

盗兒が或家へ忍び入り、犬に吠られまいと思つて、握り飯を一個投てやると、犬は「ナンでも怪しい奴と思つて居たが、今譯もなく已を可愛がる所を見ると、手前は盗兒に違ひ無い、グズ〳〵して居ると、其儘には置ないぞ、總て手先の賄賂は、心の中の悪事を、見透される者なり

●狼と羊の話

狼が犬に嚙れて動くことも出來ぬ樣になり、最憐れなる有樣にて寢て居ると、其傍を羊が通る故、狼は聲をかけ、「君ぞふか其所等の川へ行て水を汲んで來て呉れたまへ、水さへ出來れば食物は僕が自分で拵らへるからと聞いて羊は拔ら ぬ顏、「ソリヤ君知れた事よ僕が水を汲んで君の傍へ行は、君は僕の肉を直に食物にするたろう、

●狐と山羊の話

狐が野中の井戸に陷ち、出る事が出來ざれは、何かして出たいものたと考て居る所へ、山羊が來て上から瞰き込み、「オイ狐君おれも飲たいが

其水は旨いかへと云へば、狐は得たりと、「山羊君、此の水は大層旨いから君も來て飲み玉へ、と答ふるに山羊は深き思慮もなく、ポイト飛込めば狐は山羊の角を踏臺にして、井戸の外へ飛上り、上から冷笑しながら、山羊に向ひ、「手前も唯た長い髯のあるばかりで、何も成らないナア、責めて其髯の半分の腦髓があれば此んな目にも、逢まいに、

●獅子と羊の話

獅子が羊に向ひ、乃公の呼吸は臭いか臭くないかと問ば、羊は馬鹿な奴故否臭ひがしますと、

正直に答へたるにぞ、獅子は怒つて之を嚙殺し次に狼に向つて臭いかと問ば、「臭く有ませんと答しにぞ、獅子は汝は阿諛家たとて、亦之を嚙ころし、其次に狐を呼寄せて之に問ふと、狐は「私しは二三日風邪で、賢き人は劍呑な時には默つて居るとぞ、

●弓にて射られたる鷲の話

獵夫が鷲に出會したる故、弓を取り狙ひを定めてヒヨーと射ると、矢は失またず、鷲の身体を貫ぬきたり、鷲は必死の苦しみにて首を振回す時、ふと見れば、已れに射られたる矢が鷲の羽

で出來て居る故、「ア、身から出た羽で斯まで自分の身體を傷めるのか、

●呆鴉の話

或呆鴉が孔雀の羽根の美しく自分の羽根の奇麗ならざるを見て孔雀の脫羽を已れが羽根の間にはさみ朋友の鴉共にはこりて、孔雀の群へ參りますと、孔雀は此の奴不屆千萬なりとて、嘴をそろへて追出しましたが外に行き所もなきゆゑ、元の仲間の居る場所へ歸ると、仲間が入れません、ときに古老の鴉が自分の身分を能く守つて居たなれば長上にも、罰せられもせまいに、

●鳶と狼の話

樹上に一羽の鳶がとまりて、下を見ると狼が居たゆゑ、頻りに惡口すると、狼は此の卑怯ものめ乃公は汝が強いからこわいのではない、汝の居る場所がいゝからこわいのだ、高位にるても、下の人を侮るべからず、

●狐と獅子の話

また獅子を見た事のない狐が、初て途中で獅子にであつた時は、大層おそれ、其後であつた時は、少しおそれました、それから後にであつた時には、ずつと接近て、「今日はよいお天氣で御坐い

ます」と、云ふやうになりました、
餘りこゝろやすたてに成ると、兎角侮りを生ずるものなり、

●田舍漢と蛇の話

或農夫畑より歸りくる途中にて、蛇の凍死なんとするを見て憐に思ひ、我家へ持ち來り煖めしに、蘇り、漸にして首を上げ、傍に遊びゐたる童兒を見て、赤き舌を出し追ひまはりし故、農夫は大に怒り、打ちひしぎました、
恩を受て恩と思はず、かへつて惡事をなす者は、人の怒を免れず、

●熊と狐の話

或日熊が狐に向ひ、巳は人間を敬ふといふ說をじまんして、「私共は人が死で居ると、必ずよけて害をしません」といへば狐は汝等が、平日生て居る人間にも其通りならば、私は汝の說を信じます、
人を死後に敬はんより、人を死より免れしむべし、

●驢馬と狒狗の話

或人驢馬と狒狗とを畜ひ、驢馬を遠い厩につなぎ置き、狒狗は傍に置き旨き物を與へ、時としては膝に上せ愛玩せしに、驢馬は思ふやう、狒

狗は主人の傍にゐて、毎日戯て愛せらるゝに、吾は毎日用事ばかりして骨の折る事たから、主人の傍へいつて見やうと出掛けまして、主も主人の夕飯をたべてる所へ跳り込み、食机を倒し汁をおほし、皿小鉢を踏みこわしましたから、丁度臺所にゐた料理人が、棒を持ち來り、主人を援け、驢馬を打倒しまました、

自分の本分を能く守らないと、得手此の如きものなり、

●狼と羊の話

或時狼の方より羊の方へ使をやり、「いまゝで御

互に喧嘩をしたが、彼はあなたの方に犬といふ悪者が有て、兩方の騒動を引き起すから、彼の犬を追出せば、是からは仲よく交際すべし、と申遣しけるに、羊は何の考もなく犬を追出しますと、其後羊を守る犬が居なくなりました故、狼は殘らず羊を喰殺しました、

●獅子へ奉公する狐の話

或狐が獅子に奉公して、獣を見出す事を自分の役と致しましたが、巳がなんで獅子に負るもの か、直に獣を捕る方がよかろうと思ひ、獨で出掛ると、忽ち獵師に見附られ、打殺されました、

分を能く守れば、安心なり、

●歳徳神と駱駝の話

或時駱駝が角を添ん事を、歳徳神に願ひしに、歳徳神はうぬは餘り多く得んとは慾ばりなる事なり、かゝる奴は些少の物をも失ふものなりとて、其耳を切縮まりました、

●兎と蛙の話

或時四方より敵に攻められたる兎ありしが、漸く一方へ逃げ行き、池邊へ來りしに、數多の蛙が遊び居ける、今兎の來るを見て池の中へとゝび込を見て、うさぎは仕方なしに水中へ身を沈

めんとしたる、數多の兎立止り、「諸君待玉へ、我等は死うと思つたが、此の所に吾人より薄命のものが居るわい、他人の不幸に比べて、自分の心を安んずるなかれ、なんでも世間には吾よりも、勝れたる薄命者ありと知るべし、

●農夫と鶴の話

或農夫蒔つけたる田を啄荒す鶴を捕へんとて用意なし居る時に、多くの鶴と一羽の鸛が田に下りて、頻りに鶴は穀物を食し居たりける所を農夫盡く捕へたる時に、鸛が私は何にも汝の穀物

む喰ひはしませぬから、どうぞ命ばかりはお助け下さいといへども、農夫は汝の言ふ事は誠であろうが、穀物を荒す悪者と、一所に居た故、共になんぎをするのだ、自分の友が悪ければ、自分獨り正しと雖、人は信せざる者なり、

●猿と駱駝の話

或時駱駝が猿の舞をなすを見て、巳も彼等の様にやつて見せて見物人を驚かしくれんと、負ずに舞をやりますと、誰も下手のもの丶舞を見ろに堪ず、はては一同立揚り、打なやませて、言

ひますには、自巳に不相應な事は決してすること勿れ、

●鳶と狐の話

鳶が油揚をさらつて、樹の上に持ち行き、是を食はんとする時、下を通りかゝつた狐が、ふと頭をあげて見ると、旨さうな物を鳶がくわへて居るゆゑ何とかして之を食ひたいがと、考へ、鳶さん〳〵汝は聲が好いと聞て居りますから、一ツ其のよき聲をきかして下さいと云へば鳶がじまんさうに、口を開いて鳴くとたんに油揚を落しますと、狐はさらつてゆきましたと申しま

すが、是が人のへつらひを喜ぶと、後でへつら
ひ賃を取られると思へと、云ふ事です、

●烏と扁嘴鴉の話

扁嘴鴉が人の吉兆を知り、人に愛せられるを見
て、烏が巳も彼等のやうに、吉兆を人に知らせ
、譽られやうと思て考へてゐる時、二人の旅人
が來るのを見て、忽ち樹の上に飛登り、へんな
聲をして鳴くと、一人の旅人が此の烏は何か不
吉の事を知らせるのかと云へば、他の一人がナ
アーニあれは扁嘴鴉がではなく、烏が扁嘴鴉の
まねをするので、烏は平生人の不吉を知らせる

ばかりたと、申されましたが是は人の才能を猜
む奴は笑ふべきものたとの話であります、

●二疋の蛙住移の話

或夏旱魃で池の水が涸てしまひます、と其所に
棲で居る二疋の蛙が、相談して善地に住移んと
共に出立し、或夕刻野原を通り掛ると、古井戸
が有ますから、一疋の蛙が此は善さうた、水も
も在し食物も澤山在りさうたと云と、他一疋が
もし此水が悪い時には困し、こんな深いところ
からは、如何して出られませんから先々不知ぬ
事は止がいゝと申しました、

●牝獅子と獵夫の話

或日野牛が牝獅子の不在をつけこんで日頃自分の兒等を殺されたるうらみをかへさんと、牝獅子の子を突殺して逃げ去りたる後に、牝獅子歸り來て、大に慟哭しめば、獵夫が遠くから大聲をあげ、汝等に兒をとられて、泣た慈母がいくらも有と云ひましたが、是は我身を捻つて他のいたさを知れと云ふ、譬であります、

●猿の自慢の話

或日猿と狐と同道して記功碑の下を通りける時に、猿が自慢さうに、此記功碑は昔町人が巳の

先祖の名譽の爲に建てたのといへば、狐は汝の先祖や町人が其はうそたと言て出る氣遣ひ、ないと申しましたが、うそは直に、うらぎりを致されるものであります、

●獅子と野羊の話

三伏の暑さに堪かねる時候に、清水の湧出る處へ、獅子と羊が一所に水を飲に來て、イヤ吾が先じや汝は後じやと互に爭つて、しまひには噬合ひ居りしが、餘り息切れつかれましたゆゑ、双方相引にして、ふと頭上を見ると、一群の鳶鳥が孰でも死た方を、餌にしようと云ふ樣子ゆ

ゐ、獅子も野羊も俄に氣がつき、「ユウ御互に爭て彼等の餌食となるより、是から中よくしませうと直にけんくわをやめましたが、是が外寇は内憂を、鎭めると申す譬でありまず、

●鷲黄金の卵を産む話

或人鷲を飼ひしに毎日黄金の卵を一個ヅヽ、産めり主人は是を歡びましたが、かく日々一ヅヽに、ては、利益も少から、一度に澤山得んと欲し、鷲を殺し腹の中を、さがし見るに、尋常の鷲と同じで有りましたが、餘り慾ばると資本まで失ひます、

●蚊と牛の話

牛の角に一匹の蚊が止り「うしさん私が重くて、御迷惑なら、直に他へ飛でゆきます、牛「何に止てゐるとも他へ飛で行くとも御勝手になさい、何處に汝が居るのだか、少しも知れあしませんからと、申しましたが、心が小いと、矢はり考もまた小さいものであります、

●乘馬と驢馬の話

或乘馬が飾を付てかけて來り、重き荷を脊負て行く驢馬を後からぞなりつけ乘馬「ヤイ脇へよれ」とりきみつけると、驢馬は何にも言はず傍よ

けました、其後乗馬戦争の時重創を受けて、最早軍の役に立ちませんから田舎へやられました が、或日驢馬が歸途にて向より大層やせつこけた不具馬が重き荷を脊負て來のを見と、前年に威張た乘馬で有ました故、何でも身分がよくとも、下賤の者を侮つてはいけません

●蟻と鳩の話

一疋の蟻が泉水に來て、水を飲とするとき、誤て足がすべり溺れて死なんとするとき、樹の上に止て居たる鳩が是を見て氣の毒に思ひ、一枚の木の葉を水面に落してやりましたが、蟻は此

の葉の上に乘て漸く岸へ流れ付て危く命を助りましたるところに、殺生人がいつのまにか來てひるてんをはつて、今の鳩を捕んとする樣子でありますから、蟻は一生懸命に殺生人の踵へかみ付くと、其人がふるへる、ひゞきにて、ひるてんが落から、そこで鳩が飛で行きましたが、自分が他人に善をなせば他人も亦我に善をなすものです、

●谷川に立た鹿の話

或る三伏の暑さに堪かねて、一疋の鹿が谷川に水を飲に來り、水に寫る自分の容貌を見て「ナン

ト我の角はしつかりして居るが、足は痩こけて弱く見える事たと云て居る内、狩人が犬をつれ來りければ、鹿は大に驚き、林の中へ逃げましたが、角の枝に引かゝり取う〳〵と思つて氣をもんでゐる内に、とう〳〵狩人に捕へられましたが、何んでも飾よりは實用が肝要であります、

●盜賊と鷄の話

或盜賊が農家へ忍び入り、何かよきものを盜み取らんとせしに、何にも是と云ふ可きものなく、唯鷄一疋有りければ是を家に持ち歸り殺さんとする時、鷄の云ひけるに吾は何にも人間に格別

益に立つものでは有ません、唯毎朝早く各人を呼びさますのみですから、伏翼助て下さいといふと、盜賊はそれたから我はうぬを殺さねばならぬ、汝が早く人を起すので吾の營業のじやまになるのだと云ましたが、善き事は悪き事の讐敵となるものであります、

●鹿と獅子の話

鹿が虎におひかけられて、見掛けた巖窟へ逃げこむと、其れがあいにく獅子の栖洞で有て、獅子は今鹿が飛込で來たから、之を嚙殺さんと傍へかくれて居た故、鹿は少しも氣がつきません

で、是は誠にいゝ隠場だと歡でおつて、來た虎の行き過ぎたのを見て、ヤレ安心と出掛やうとすると後から獅子がとびついて、殺ましたが、一の危難を免んとする時は、他の大危難に合はないやう、用心することが、肝要であります、

●兎と獵犬の話

獵犬が林の中から兎を狩り出しましたが、兎は遂ににげのびました、すると途中で出合た野羊の飼が、犬の失望の樣子を見て、二正の内では兎の方が足が早いから、汝は追付ものかと笑ひますと、犬が申すには一正は命がけで逃げ、一正は

は食ふ爲にかけるのですから、命がけでするものには、負けますと云ひしとぞ、

●海豚と鯨の話

或日海豚と鯨の間に、戰爭が起りますと、鰯魚が双方をなだめ引分んとすると、一正の海豚聲をあらゝげ、汝の取扱で治るものかと云ひましたが仲人に出て治るには、夫たけの威望なければ、人が承知せぬものです、

●二正の犬の話

或人白と黒の二正の犬を飼ひ、黒犬には山獵を教へ、白犬には門番を教へ、主人が山獵にはい

つも黒犬を連れ行き、獲あれば其肉を等しく分ち必ず白犬にも與へます、黒犬が白犬に云には我は毎日山獵に行き中々骨の折れることたの貴様は家にばかりゐて美い肉を食ふとは、僥倖ものじやと云ふと、白犬が我をそんなに悪く言な、此も主人の教へ方によるものにて、我は主人が番をする事ばかりで、何にも外の事は教てくれなかつたから、たと答へましたが、何でも小兒の營業の善悪は、みな父母の教に由るものであります、

●馬と買客の話

人は其交る友に依て善悪の知れるものですが、或人が一疋の馬を買とせし時、「まづ試驗した上にて取極を致すべき約束にて連れ來り、自分の馬と同じ厩に入れ置き、翌朝になりて其馬を試驗せんと、主人は厩に來ると、昨日連れ來りし馬はいまゝで飼ひ置ける横着なる馬と遊び居りしかば、是では試驗にも及ばないと言て、直に賣主に返すと賣主はなせ試驗をしませんと問ふ故、「ナニ彼は試驗には及びません、昨夜厩にて横着なる馬を友として居りましたから、友馬の性質で能くわかりました、

●兎と獅子の話

兵力がないと國に威光がないものですが、爰に一疋の兎が獅子に向ひ何でも世の中は、尊卑大小となく權利が一樣でなければならぬと云ひけれは獅子は笑ひながら、「ナル程汝の言ふとは御尤だが、私の樣に爪と牙がありますかと申しました、

●狐と假面の話

狐俳優の家へ何か盜みにはいり、所々を探せしに好相假面を見附けたして、狐が手で其假面をじやらしながら狐「ア、好禿顱た、惜哉に腦が

ないワイ、

●亂噪蟲と梟の話

梟は晝睡て夜は稼ぐ生附ですが、或日のこと叢の底で、亂噪蟲ががちやく〳〵鳴てるますから、梟は懇切に「モシ〳〵少し靜にして下さい、私は汝さんが鳴のので噪くて少しも睡られませんといへは亂噪蟲はぐず〳〵云な、巳の勝手だと云つゝ意地を惡くなほ喧くがちやく〳〵と云ました故、梟は餘儀なく堪へて居たりけるが、此時百舌鳥が氣の毒に思ひ、ぞうか梟に仇を討せて遣たいと考へ、百舌鳥「亂噪蟲さん、汝の聲は美いさうた

が、先から鳴ぞうしては、たまるまい、私と一所に水を飲で來ませうと云ば、亂噪蟲は何の氣なしに叢から飛出す所を梟が之を見て、亂噪蟲を啄殺し仇を返しましたと、

●獅子の病氣の話

或獅子が病氣にて餌食を獲ることが出來ないのを見て、他の獸どもが何しろ見舞に行てやろうと、獅子の洞に來れば、獅子は臥てゐながら夫を誘寄せ、頻りに好き食物にあり取ては食ひ、付いたと歡んでゐるが狐は此の樣子を知り、獅子のとこへ參つた時に、傍へは行かず、

遠くにて御病氣は如何と尋れば、獅子はサアずつと御寄なさい、汝はなぜそんなに遠くにゐるなさるのですと云ひければ、狐は足跡が內へばかり向つて、外へ出た足跡が見えませんから、安心が出來ません、

●雀と兎の話

雀が鷲に摑られて、ヒイ〳〵喚て居る處へ、兎がやつて來て、兎「なんと汝は食物の澤山有るところを知てゐるかと云と、鷲が舞下りて兎を摑み殺したり、其時雀は歡んで、汝は他人の憂も知らずに、自分の利益ばかり考へて居るから、

遂に摑み殺されたのである、

●鬪鷄と鷲の話

二羽の鬪鷄が互に鬪戰をしましたが、一羽は負て他へ逃てかくれましたが勝たる一羽は高塀に翔上り、首を振立て威張て居ますると、鷲が之を見て其鷄を攫み上げて潜みたる鷄の所へつれ行き、自分助太刀して以前負たる鷄に勝せましたが、何でも傲り慢ると、滅亡の基となるものであります、

●鷗と鳶の話

鷗が無理に大なる魚を丸呑にしましたから、胃

の腑が裂て海濱にて死倒れたるを、鳶が來て申すには、彼は食ものが餘り澤山あつたから、慾ばつて居るからた、わが職業を大切に守て居れば、安心たのに、自分の力に出來ない投機をするから、損をするのであります、

●獅子と熊と狐の話

獅子と熊とが、鹿の死骸を見附け、各自に獲んと死物狂ひになつて噬合て、双方共軟弱になつて居る内に、樹のかげから一疋の狐が走來り死骸を攫去て逃て往きました、

●鳩と水瓶の話

或鳩が渇に堪かねて、遙か向ふを見ると水瓶の有るを見附け、歓んで水を飲まんと来て見ると水低くして啄とゞかず、そこで種々考へて、小石を一つゞ、啄にて運びては、瓶の中に入れると、水量が段々増して来て、終にふちまで上りましたが力の及ばぬときには工夫が肝要なものであります、

●雀と教解の話

或人黏竿にて雀をさして、是を殺さんとすると き、雀がかなしき聲にて、「ぞうぞ命をお援け下さいまし、御禮として三ツの大事を教へん」とい

ふ、鳥さしさらば申せ汝の願通り助けて遣はすべしと有ければ、雀は歓びて、「第一に有べからざる事を有と思ふ勿れ、第二は得がたき事を得んと思ふ勿れ、第三に去てかへらぬ事を悔る勿れと、此三ツを能守れは生涯幸福にして誤りなしと、いふ鳥さし是をきゝ如何にも道理にかなひたる事なりとて雀を放還しました、其時雀は高き梢に飛あがり上より鳥さしの方を見ながら、「さて私の腹には珍らしき寶玉が澤山ありますが、此を得は世に比なき富貴を得べし」と言けれは、鳥さしは放還したるを悔ひ、再び之をさゝ

んとしければ、雀は一段高き枝に逃げ行き、「いかに汝は愚人なるぞ、如何なれば只今教へた三ケ條を何と考へたるや、第一有るべからざる事を有と思ふ勿れと、我腹に寶玉の有可筈なし、第二に得がたき事を得と思ふ勿れと、然るに得がたき我を得と思ふは如何、第三に去てかへらぬ事を悔る勿れと、我を一度放還したる後に悔るは如何に、總て世の中の人は此三ツに惑ひて終身心定らざるもの多しと云つゝ、林の中へ飛行きけり、

●驢馬と陰の話

或人が一疋の驢馬を雇ひ乘行きしに、丁度夏の極熱い日にして廣き野原に至りければ、何か涼しき場所にて休まんと思へ共、廣き野原のことなれば、涼しき陰もなかりしに、不圖驢馬の陰に氣が附きはいり込と、馬奴が吾にも少しと云つゝ、旅人を押出せば、旅人「ナンダと此驢馬は吾が買切たのだ」と互に爭ひ果ては交戰せんとする有樣なれば、驢馬は驚きて逃出しましたが、人は無形の事を爭つて、有形の物を失ふ事が、多くあります、

●狐と樵夫の話

狐が獵夫に追かけられ逃げて參ると、樵夫が居るのを見て何ぞ援けて庇蔭て下さいといひけれは、樵夫が隱れ塲を教へたり、スルト獵夫が來り今此所へ狐が逃て參りましたかと云しに、樵夫は存知ませんと云ながら狐の隱れたる所を指さしけるに、獵夫は氣が附かずに行き過ぎたるを狐が見て、安心して出掛て行かんとする時、樵夫「ヤイ汝は人に援けてもらつて禮を云ずに、行く事は有るかといへは狐は汝の心が口と同じ樣ならは、何して禮を云ずに行かれましやう、

●狼と獅子の話

獅子が何か美食物はないかと所々を尋ね參ると向ふより狼が羊をぬすんで來のに邂逅しましたから獅子が之を奪ひ取ると狼は遠くへ逃げ行ても安心と思つて「ヤイ盜賊め吾の餌を奪やがつてと惡口すると獅子が勿論汝の物サ、たが汝も矢張り外から盜賊したものたらう、

●羊の番をする牧童の話

羊の番をする牧童が毎日番をするはかりで、退屈して或日狼が來たと叫びましたから、多くの人が駈つけて參ると、何にも狼が來のでありませんから、牧童は皆が大騷動をするを見て笑つ

て居ます、然るに一日眞に狼が出來りたれば、牧童は驚いて大聲あげ、狼た〳〵と呼びましたが、人々例の戯と思つて參りません内に數多の羊が一疋も殘らず狼に食れましたが平常虚言を談すものは緊要の時に實事を云ても、人が信用しません、

●鷲と烏の話

或日鷲が一匹の子羊を摑み去るを樹の上にとまりて居たる烏が、遙かに見て、羨しく思ひ、吾も一番鷲のやうに摑み去て鷲の強い力と勇氣に負けまじと、諸方を飛廻り、最も肥え太りた

る羊の背に飛付き摑み去らんとしたるに巳の爪が羊の毛に引掛つて一生懸命に翼敲して見たれども容易に取れませんで騒いで居る内に、牧場の人が駈來り烏を攫まへ羽を切て直に家へ持歸り、子供に與へましたが、子供は何と云ふ鳥たエと云と親父が答ふるには巳はたしかに烏たと思ふが此鳥は自分では鷲の積りで居るらしい、

●老たる犬の話

昔時は勢も盛んでありたる獵犬が、よる年浪に衰へて、既役に立ぬ樣になれり、この犬或日猪を驅出し、その耳に喰つきけるに、牙にしまり

がなくて猪脱去れり、其時主人は追來り獲物を
にがせし罪を罵り、鞭を揚て打んとしければ、
犬「年老た私を助けて下さりませ何も勝手でにが
したのでは御坐りませぬ、全く力が落たからで
御坐ります、今日の過失を激怒なく、ぞうぞ昔
時の功勞を思つて下さりませ、

●鼠と蛙と鳶の話

鼠が蛙と心安くなり、或日旅を思立ち相伴て出
立せりその道中にて踏迷ぬ樣にと、鼠の前足を
蛙の後足へしばりつけ案内して躍行しが、忽ち
小河の岸に來ると蛙は惡念を起し、鼠を水中に

引入んと追々水底へ潜り入る、然るに鼠は最早
息を塞て、間もなく其死體が水面に浮出たり、
此時一羽の鳶が是を見るより、よき餌食ぞと舞
下りて、中流に有たる鼠を攫んでたゞ一翼にと
びあがると、蛙も諸共に空中に吊されて、同じ
禍にかゝりける、勘辨なく惡友と遊べば果は禍
にかゝるべし、

●蠅と蜜壺の話

或蜂蜜商の店で、蜜瓶が倒れると多くの蠅群り
來て、一滴も殘さず、甜爭ひ居たり、然るに少
時たつと、何れも足重く氣ふさがりて飛ぶ事も

出來ず、そこで蠅が皆歎息して、嗚呼自分等は馬鹿だつた、一時の飲樂の爲に大切な生命を損ふとは、口々に悔合けるとぞ、

●獅子と鼠の話

午睡して居た獅子の鼻へ、鼠がかけ上ると、獅子が目を醒し大に怒りて、一潰しに踏み殺さうとすると、鼠が愍然に願つて云ふに、「不意したので御座りますから、何ぞ御助け下され御恩は必とおかへし申しますといふを聞て獅子は鼠を免したり、其後この獅子が獸を駈て走り廻ると、獵師の設けたる罠に掛り逃られず、そこで以前の鼠が駈け來りて、繩を嚙切り獅子を助けたり、

●犬と鷄と狐の話

犬と鷄が一所に旅行しましたが、或夕刻に並木にて一泊いたさんと鷄は樹の梢に栖り、犬は幹の凹の内へ臥したりしが、味旦になると鷄が先に起きますと、狐が來り私と一處に朝飯を食べますから爰へ下りてくださいと云けるを、鷄は聞て其ではそこの幹凹の中に私の朋友が居ますから起して下さいといふ故、狐心得て幹凹をのぞきこむと、中から犬が躍あがつて、狐を喰殺し

ました、

●蛙と牛の話

或日牛が澤畔に出で草を食ひ、あちこちあるきけるとき、一疋の兒蛙を誤つて踏潰すと、母蛙が來て一群の内に居る兒蛙を見失ひける故、母蛙が他の兒蛙に聞くと、さつき巨大なる四足の獸が來て踏潰しましたと云ひければ、母蛙其の獸はこんなに巨大なりしかと、腹を膨脹したるに、兒蛙がまた其では、半分にも足りないと云をきゝ、其なら此の位かと腹を一ぱいに膨脹せしに、腹は遂に破れました其たから自分不相應

なる巨大なる仕事をせんとするものなり、

●驢馬と蟋蟀の話

驢馬或日蟋蟀の唱ふを聞き妙聲なり、吾も彼なる聲を持たいものたと蟋蟀に向ひて、「マア汝は何を食べて妙聲が出るのですと、きゝければ蟋蟀答へて、「ナニ別に食物もありませぬ、たゞ露ばかりすつて居ますと」いふ故、驢馬は何にも食はずに露ばかり嘗て居たれば、ほどなく飢て死ましたが、他人に薬になるものでありますと、自分には毒になるものでも、

或時毛蟲多く集りて眷族の多くあるを各自に誇り爭ふ事ありましたが其論次第に片付ければ、獅子と眷族の多少を較べんと皆々獅子の洞窟に來り、先づ牝獅子に向つて汝は何疋子を生しやと」問へば牝獅子は大に怒り肱を張り我には唯一疋でも此雄兒がありますと言ましたが、質惡しく數多きより、少なくとも質の好き方勝れり

●山内一豐駿馬を買ふ話

山内一豐は始めて織田信長に仕えんとする時、駿馬を買はんとしけるに、其價貴きを以て買ふ事が出來ざれば獨り嘆じて居りしを其妻兼て節儉貯蓄したる金子を以て、是を一豐に出し之を買はしめたり一豐或日此馬に乘り信長に謁しければ、信長が曰には我が家士は多けれ共、未だ一疋の馬を買ふ事は出來ざるに、汝は如何して買得たるやと問ひけるに一豐答て云に妻の節儉貯蓄より買ひ得たる由を申上けれは、信長大いに其の行ひを賞し、祿を增し一豐を任用せり、

●母と狼の話

或夜狼餌をさがしに東西あるき或家の窓下を通りかゝると、丁度小兒の泣聲がして母の叱る聲

を聞きたるに、狼は何事にやと佇立り耳を聳て是をきくに、母の聲にて「サア坊や泣なさんな、泣くと狼に投與しますよ」といふゆゑ狼しめたり好下物にあり付たと、軒下に肅然して待て居るとやがて夜も更けて小兒も泣止めば、母再度「ウム好兒たもし狼が喰ふとて來たなら打殺してやるぞ、ウム打殺してやるぞ」と、いふゆゑ狼はまるで當がはづれて、これは山窟へ歸るのが遲くなつた、腹がへつてたまらぬと急いで山へ走歸りましたが人は多くは口でいふ事と、腹で思つてゐる事とあべこべであります、

猿と海豚の話

或人航海するとき猿を連て乘込みしが颶風俄に起り船は覆かへつて乘組の人々皆海の中へ落入りし時に、海豚は猿の水中に浮沈するを見て、人と思ひ是を助けんと背の上に乘せて陸を目がけて泳ぎ行くときに、海豚は「旦那は「アデン」の御人ですか、猿「さうです、其地の豪農の一人であります、」海豚「夫では「ピリース」アデンの港名を御存知ですか」と、いへば猿は人の名たと思つて、「ピリス」は我の朋友たと云へば、海豚は猿の僞を怒り、波の底に沈めました、

●片眼の鹿の話

一日片眼の鹿が海邊に出で草をはむに、失たる眼を海の方に、明るき眼を陸の方にして、是では假令狩人が來ても大丈夫だと安心して、遊んで居ると、武士兩三人舟遊びに出かけ、あちこち漕まはつて、岸に鹿の居るのを見つけ、忽ち弓に矢を注へ是を射てけり、其時鹿肩息ついて云けるは、嗚呼吾はゞ運の弱ひものはない、なんでも危殆たと思つた方は安泰で大丈夫だと見込んだ方から敵が來た、

●鶴と雁の話

或日鶴と雁と同じ畑に降りて、餌をさがし居ると、忽ち狩人が出で來り鳥網を被せやうとすると、鶴はやせて身輕ゆゑ、早く翼敲をして、唯一途に飛去りましたが、雁は肥て身が重き故、急に逃る事が出來ず、遂に狩人に獲られました、が、世の中は重きものより、輕きものがまして ありまず、

●猫と鼠の話

或家に鼠數多すみて、チウ〳〵狂廻るにぞ飼猫は餌食に差支へなかりしが、鼠は追々利口になり、猫の傍へは來らず吾巢穴の入口に居りて、

猫來れは忽ち逃げ入るにぞ、何とぞして鼠を誑し誘せんと考へ、自分の軀を袋に入れ首と手足をさし出し、棟に足を引かけ吊されたやうに見せかけ息を殺していると、やがて一疋の鼠來りていふ樣、「イヤ嬶公いつまでも其處に御勝手にさがつて居らつしやい、今まで幾箇も袋を見たが又猫の首の付て居る袋を見た事がない私は汝のところへナニ往はしませぬから、

●鹿と葡萄蔓の話

或鹿獵人に追駈られ、野葡萄の生茂りてゐる中へ逃げこむと、獵人は之を一向に知らずに往過ぎたり、鹿は事濟たと安心をして葡萄の蔓を食ひ始ると、一番後から來た獵人が葡萄の葉のがさ〳〵云ふ音に氣がつきとつて返し、ヤア鹿めが爰に居たなと矢を射込みたり、鹿は其矢に中つて苦い息の下から、我は恩知らずだからまんなめに遇たのだ、なせ危いときに助けてくれた葡萄の蔓を喰たらうと云ひましたが、恩を受て恩を知らぬと、こんなものであります、

●野羊と牧奴の話

一人の牧奴が群を離れて居る野羊を、ラッパを吹きて呼たれども、歸り來らざれば、牧奴は短

氣を起し小石を拾つて野羊に投付ると、生憎角に當り角がかけたり、そか此の事を旦那に談さないやうにと云ひけれは、野羊「汝は馬鹿た私しが言はないでも角がそう言ます」と申しましたが證據は言葉より明白であります、

●鹽商と驢馬の話

山手に住む鹽商が鹽の相場の下落たのを聞き、飼てある驢馬を連れて鹽の買入に出掛たり、さて驢馬に附られるたけ荷を附て歸る途中にて小川の處へ來ると、驢馬が石に躓いて河の中へ落

たり、すると荷は鹽故、不殘溶て仕舞つたり、そこで驢馬は身輕になつて歡んで家に立歸りました然るに主人は損をして忌々しく翌日は前より多く鹽を買込で、驢馬に負せて丁度川の處へさしかゝると、驢馬は故と川の中へはまり込めは、鹽は復溶けて仕舞つたり、主人は二度の損に、以ての外腹を立て此悪癖を直さなければならぬと、又次の日に驢馬をひいて出掛け今度は海綿を買込み、例の路をやつて來て川へさしかゝると、驢馬は此處じやと川の中へころげ込むと、荷が海綿ですから水を含んでたいそう、重

くなり中々〳〵忍耐が出來かねたれども、元來自分の悪い事故仕方なく、重荷を脊負て我家に歸りましたが、同じ趣向が、何事にもはまるわけには參らぬものなり、

●兒輩と蛙の話

兒輩一群になつて池の邊りに遊び居りしが、水の中に蛙の數多泳ぎ居るを見て、手にて小石を拾ひて、蛙に投付ると夫が爲に數多の蛙は殺されたり、時に勇氣ある一正の蛙が水の上に首を出して、蛙「コウ御坊さん悪戯をなさるな、汝の樂は我輩の命にかゝりますと申されましたが、

自分の爲に樂にても、他人に害になる事は、決して爲すべからず、

●盲者と狼兒の話

或盲者が種々の獸を撫で當ることに妙を得て、自慢して居りますと、或日人が一正の狼の兒をつれ來り、此の獸は何たか當て見賜へと云ければ、やがて盲者は撫て見ながら、胡亂な顏色をして、「我は汝の父は犬たか狼たか知らないが汝を羊の類とは思やアしないから、羊飼の手に仟して育てちや、不安全なものだ」と、申されましたが、悪性質は早くより知れるものであります、

●日輪を上訴た蛙の話

夏の極く熱い時分に、日輪が妻を迎へ給ふときゝ、鳥も獣も皆目出度と歓び居たるに、獨り蛙ぞも大に心配して、是は吾輩は歓ぶぞころではない大變な事が出來たのじや、何卒して其事を廢止にして貰はんと、蛙の内にて一番賢き者を使者としてジビター大神に訴へけるは、蛙「獨日輪さまでさへ、熱くて堪へられないのに、此の上に妻を迎へて共に沼を照されては、我ぞもはマアぞんな憂目にあうか知れやしない、

●鍛治工と犬の話

或鍛治工が一疋の犬を飼ひ、大そう之を愛して居ましたが、此犬は至つてなまけものにして、主人が仕事にかゝると寐はじめ、飯を食始めると起きかけるから、或日主人が飯を食べて居ると、例の通り尾をふつて來り、食物をねたる樣子なりければ、主人は此の懶惰生汝ア我が仕事をすると寐て飯を食とときには起るやつたから、何にもやらないぞと言て、追出しました、

●獅子と海豚の話

海豚を見て聲をかけ或獅子が海岸に徘徊せしとき水面に浮出でたる獅子「我は獣の王じや、君

は海魚の首長じや、何と好い朋友ではないか、」と云けるに、海豚「ナル程貴君の仰の通りですから、是から水陸同盟しませう、」と言てもし敵の來るときは互に助けあう事を約束せり、其の後獅子と海豚と戰爭をしけるとき、獅子は海豚に加勢を賴みしに、海豚は來て助けざりければ、獅子は大に怒り嚴しく掛合しに、海豚「そうお科めなさるな陸に栖む者と、海に居る者とは、權威が異いますから、我を海の統轄者に立て下さる間は、陸に住んで權威を取る事は、天神が許可になりません」と、朋友は能く撰ばないと、自分の扶にはならぬものであります、

●秣槽のある犬の話

或犬が秣槽の内に臥居る時に、二三疋の馬が秣槽を喰んとて、其處へ來かゝる故に、犬は之を寄附けまいと大聲に吠へたり、然る所へ一疋の馬が飛び來り、馬「この貪欲犬見ろ呆犬が、喰もしねへくせに已にまで喰せねいな」と、云て大に怒りましたが、意地の悪い事は、するものでありません、

●牛と屠牛者の話

或日牛ぞも打揃て我等を無慚に殺すものは、屠牛者ぞもと思はるゝぞ彼等を悉く殺さんと、各牛角を磨で攻寄る用意をなしたり、すると其の中の一疋の年長けたる頭牛が、「成程汝輩の立腹るのは道理たが、能く考へて見なさい、萬一私共があの屠牛者を殺しあふせたとて他の屠牛者の手に罹り、殺し損なはれ苦むなら、最初から一思ひに殺された方がましだ人々が牛肉を要めない譯には行くまいから遂には私共は屠られるのたが識ぬものゝ手にかゝつても苦むよりは、悪くても識てゐるものゝ手に堪忍

して居る方が、よいものであります、

狐と蝸の話

或狐が河を渡るとき、急流の爲におしながされて狹き灣口にたゝきつけられ出る事が出來ずして暫時たゞずみ居たりけるに、野蚊ブン〳〵群集て隙間無たかり、血を吸いたり、其時丁度近邊を通りかゝつた蝸が此有樣を見て氣の毒に思ひ、「苦めてゐる野蚊を、拂つてやらうか」と、問しに狐が「何に其には及びません」と、いひしゆゑ蝸は不思議におもつて、何故でありますと聞くと、狐が「汝も道理のわからねへ事をいふ、今我

に附てゐる野蚊は腹が滿て既少許ばかりしか、血が吸へはしません、然るに若し汝が此野蚊を他へ追て下さると又新規の野蚊がとりつきまして、以前より餘計に血を吸はれますから、

●龜と鷲の話

或る暖き日に龜が池のほとりに偃曝して居て、頻りに天空を眺望てゐたりしが數多の鳥が面白さうにかけまわるを見て、羨しく思ひ、ア、巳の此の世に生れながら、空程不運なものはない、中に飛ぶ事の出來ぬとは誰か飛ぶ事を教へてくれるものはないかしらと、獨言を云居りしに、

この時鷲が龜の言ふ事を聞つけ、翔來り龜さん僕が教へてあげるから、我の脊の上に乘りなさいと云ひければ、龜は大そう歡んで鷲の脊の上にのりたり、やがて鷲は龜をのせ空中に飛上りぬ、稍てサアこれからは自身で飛でごらうじろと放突せば、龜はさかさまに、山の頂きへ落こち、甲羅を微塵に打碎きましたが、足る事を知らぬと、遂に災難にかゝるものであります、

●馬と蛙の話

材木を澤山に脊の上に積たる馬が、池の邊りに來りしが足が池の傍にある大なる石につまづい

て、池の中へをつこちたり、然るに荷物が材木でありますから、水をふくみて重くなり、上らうとしても上られず、大騒ぎしてるると池の中に住でるたる蛙が、云ひけるは、オイ汝それくらるなことでそんなに大騒ぎするやうでは、巳のやうに、水の中に住でるたら、ぞうするたらうと申されましたが、針はぞのことを、棒はぞに云ふものではありません、

犬と羊の話

或日犬が羊に行遇て、先日汝にかせし一石の麥をかへせ、若しかへさなければ、汝を嚙み殺すぞといふに、羊は大に驚きて、貴君より麥をかりし事はなしと云ひければ犬は大に怒り、汝はそんなことを言ても、吾の方はたしかに貸したと云ふ證人が澤山あるぞといつて、狼鳶鴉なども證人となりと云ひたり、かく犬にのみくみするも證人にて候と申し述べ、鴉も出で來り私延して私も證人にて候と申し述べ、鴉も首をもの多くして、遂に理を非にいひなせしかば、羊はせん方なく一石の麥をつくのひましたが、

兎角世の中には、善人に組する者が少くして、悪き者に組する者が多いとは、さて〳〵淺ましき事であります、

●放蕩者と燕の話

或人放蕩で身を持ちくづし、父母から譲られた田地をば皆賣拂つて、酒色の爲に費やし、今は外套の外、何にもなき身分となれり、或日此放蕩者が、山に入り、彼方此方と歩行し來たり、やがて山を下り、池のほとりへまゐり、ふと燕の遊びるるを見て、感を起し、「燕は春夏の候に來り、冬の寒き時分には暖かき地方へ行く

し、夫ゆゑ外套がなくつても、差支はあるめへが吾は此外套を賣拂つて仕舞へばこの冬は「凌ぎ通せないが、嗚呼吾は心がらとはいひながらあれな有様になつて、とつまらないなア、燕にもかなはないとは何

●孫叔敖兩頭の蛇を殺す話

孫叔敖或日朋友兩三人と野に遊び、最早日くれになりましたから朋友に別れ家に歸り、大聲をあげて泣き居たりしかば、母聲をきゝ怪み來りて其わけを問けるに、孫叔敖答へて云るやう、私は野に遊び居りし時草の中より兩頭の蛇あら

はれ出づるを見たりしが、俗に兩頭の蛇を見たる者は其生命三日を保たずと、故にかく泣き居るなりと、母大に驚いて言ふには、兩頭の蛇は今ぞこにあるかと、其とき孫叔がいふには、再び人が見て其生命をちゞめんことを恐れましたから、殺して地のなかへ埋てまるりましたと申けるを、母之をきゝあわれに思ひ慰さめて申けるやう陰徳あれば陽報ありと云ふことがあるから、汝は慈悲ぶかき性質ゆゑ、生命は當に、百年もいきながらへるべしと言へりとぞ、

●熊と旅人の話

朋友二人連立て旅行せしが、或山路にかゝると、其途中にて俄に熊に出逢たり、一人はもう必襲たと考へ、地面に倒れ成るたけ息を殺して居ると、熊が來り自分の鼻であちこち嗅廻り、行倒の者だと思つて、行去れり、而するとて木に居たる一人が、降て來て倒れ居る友人に近づき、笑談に、今熊が汝に何んか耳語した樣だが、何を云ました」といへば、倒れて居た友人がおかしさをこらへて、「イヤ別にさしたる談しもありませぬが、彼の熊の教へるには危險の時に自分の身ばかり守

つて、友人の危いのを見捨るものと、交際せぬがよい」、と云ひました、

●庸醫と蝦蟇の話

或日蝦蟇が沼より陸に上り、野獣に向つて云ける は、私は多年醫術を學び、如何なる病でも治らぬ事はないと、云ふを狐が聞て、先生は自分の跛や皺も治すことが出來ないくせに、ナント他の脈が察るものかと、云つた、

文廼家主人著

●急ぐほど遲れる話

或る貴いお方でございませう、馬に乘て旅をしました、恰ど十二時でろに宿場へ着き、或る茶屋で中食をし、また馬に乘て出掛やうとする時、馬丁が、「旦那鐵踏の釘がぬけて居りますから此宿で直して參りませう」、と申しますと、旦那「ナニ釘は拔けても六七時間は保つから宜しい、今日は急ぐから」、とそのまゝ出掛て、午後四時で

ろに或る宿場で小憩いたし、馬丁は馬に水をやり踏を見るに、保ちさうもなき故、また前の如く云ひますと、旦那はまた前の通り云つて、馬丁のいふことを聞ませんで、出掛ますと、馬は足を痛めて少しも歩行することが出來なくなり、とう〳〵倒れましたから、旦那は止むを得ず、馬より卸りて歩いてまゐりました故、大層道が遲くなつたと申すことで、之が急げば急ぐほど遲れるといふお嘲しでございます、

●怠惰者と太陽の話

或る怠惰者がありまして、一日午睡を致し居り

て、夕刻に目をさまし是は大へんもう太陽樣がお歸りになりさうなたから、「太陽樣〳〵〳〵」何卒もう少し御待下さい、種々仕事が有ますから」と賴みたれども、太陽樣は其のことを聞入れず、ずん〳〵にげていきました、

●根津權現と車引の話

農夫が車に重き荷を積み、泥濘る小路に參りますと、車輪泥土にはまりこみ、少しも動きませんにと願ひますと、只根津權現を祈り、何卒車の進みます樣を出し輪を押すべし、忽ち權現顯れ出で、汝自ら力如何に神佛なりとて、自

ら勉めざるものは、扶ける道なしと云ひけり、

●小野道風書を學ぶ話

小野道風は、書の名人となつた人でありますが、未だ年少かりし時書を學べども、其技藝が上達ませんでしたが、一日庭に出で柳の傍を通り過んとする折、蛙が枝に飛び上らんとして、たび〳〵身をおどらし、遂に枝に移るを見て、精神ひとたび到らば、ぞんな事でも出來ない筈はあるまいと感じ、其より日夜怠らず勉強して、後に有名なる書家となりました、

●晋の車胤勉學の話

晋の車胤と云ふ人は、家貧にして油を買ふことも出來ない程でしたから、夏には布嚢に多くの螢を入れ、其の光にて書を照し勉強しましたが、このやうに精出した人ですから、後に官吏部尚書と云ふ、貴い役になりました、

●徳川家康剛勇の話

徳川家康幼き頃、従者の脊に負はれて、石戰の戯を見て大に興に入り、自分も此戯をなさんと云ひけるに、従者は君は未だ御幼年なるゆゑ、かゝる危き遊は止め賜へと申しけるに、家康は中々聞入れざるゆゑ、従者も詮方なく然らば人

數の多き方に加はり賜へと脊より卸したる時、家康大に怒り、汝等かゝる卑怯の事を勸むべからずと云て、小人數の群に加はり、大に功名を表せりとぞ、

●二人の旅行者と斧の話

彌次北八が兩人して旅行したる途中にて、彌次が斧を拾ひ大に歡び、「オイ北八こんな好物を拾つたせ」、北八「それは兩人して歩行て居るのたもの、汝等一人の物じやない、吾も其の仲間に入つて居るのが至當た」と互に爭ひつゝ五六町來る、後から遺した人が「この野郎待て」と聲を掛け

た、彌次驚いて「吾輩は盜みァしねへ」と云ふと、北八はこれをきゝ「オット彌次さん吾輩と云つては困るせ、吾と云つてもらひたい」といふ話があります、是は樂を分つて人に與へないものには、憂を分つものはなないと云ふことです、

●守錢奴の話

或る守錢奴が衣服器具は火難あり賊難あり、家屋田畑も人に貸すから安心が出來ず、是は何でも殘らず賣つて、金でしまつて置くのが一番の上策と考へて、今まで持て居たものを悉皆賣拂ひ、人に知れないやうに深く穴を堀て埋て置く

と、何時か泥棒が盗取て行きましたとは知らず行つて見ると無いゆゑ、大聲を上げて泣きましたとき、傍を通りました識者が「汝さんは金の代りに石礫でも埋て置く方がようでさんしよう、唯握つてゐるはかりでは金銀の徳はありません」、

●童子と盗人の話

或る井戸の傍に一人の童子遊びゐるとき、盗人一人出で來りければ、童子は盗人に向つて、我は今黄金の釣瓶で水を汲まんとするとき、誤つて落しましたと云ひければ、盗人はこれを聞いて心の内に歡びて「夫を取り上るは容易のこと

なれば、我がいま井戸に入りて取て來て上るから」と言ひながら衣服を脱ぎて、井戸のなかに入り、こゝかしこと尋ねたれども見當らざれば、登り來りて見れば、童子はいづれへか逃去りけるとぞ、他をはからんとすれば、かへつて他にはかられるものです、

●親父と二人娘の話

娘二人持たる者が、姉を植木屋へ妹を製瓦工に嫁入させましたが、五六日過ぎて親父が植木屋へ參りまして、家内の折合は如何にと尋ねるに、姉の申すには誠に折合は善うございますが、

雨が澤山に降りますと、營業にようございますと云ひけるが、歸り途に妹の方へ行き尋ねけるに、妹の申すには折合は誠に善うございますが、毎日天氣が續くと營業によう御座いますと云ひましたが、各人勝手な事ばかり言ふものであります、

●山國の人と海の話

柔和な人にても惡い人におだてられてゐる時は恐しいものでありますが、或日山國の人が、海岸に行き海を見て多くの人が乘込でゐる大船が波の爲に搖られて危き有樣を見て「ア、海は恐し

く荒れて居るが、此の船に乘てゐる人が危險なものだ」と言ふと、海が「モシ君私は靜かでありますが、風が來て動搖ますのですから、風の去つた後は靜かであります」、

●ランプの話

或る大集會のありし夜、十分石油をふくんで光りかゞやき居るを、滿坐の中で自慢して「ナント拙者の光は日や月や星などより明るからう」と大言を吐くと、折から風が吹いて來てランプ忽ち消されたり、時に主人がマツチで明をつけながら「コウ以來餘計な口をきゝなさんな、天の光は

決して吹消されやしねへ」と、餘り前後を見ずに大言を吐くと、直に頭を壓へられるものであります、

●椽樠と蘆の話

暴風雨の時、ある河、堤に生長ちたる椽樠が根返して河を流れ下りたるに、汀に無事に生ひ茂る蘆を見て「是は細く軟弱い汝が嵐に保つて居ると は、不思議なものだ」と云ふを、蘆は聞いて「それは當然さ、汝はあの樣な嵐に逆つて、只一節に曲まじとせられしゆゑ、吹倒されたるなり、吾は輕き風にさへ逆らはず、伏つ曲りつ避るゆゑ、

いつも無難に候ぞ」と言はれたるが、總て手強いものには、逆はぬがよろしきものなり、

●老人と死神の話

或老人が遠方から大束の薪を負擔て來た處、その途中で疲勞て來てたまらないゆゑ、その薪を投り出し、路傍に坐踞ながら「エ、こんな苦いめをするくらゐなら死んだ方がましだ、死にたいものだ」と思ひ「死神さま早く迎ひに來て下さい」と祈りければ、死神全く現れ出で「死にたくはサア來い」といふと、老人「まつぴら御免なさい、今までの通り薪を負擔て居ましても、ぞうぞ生き

て居たう御座ります」兎角貧乏人や老人は、死たいの引取て貰たいのといふものですが、死たいといふのは其時ばかりで、サア引取るといはれると、まつぴら御免下さいと言ふやつです、

●北風と日輪の話

或時日輪と北風との間に争論起り、孰が力の強からんといふ果しなし、さらば今此處を通りかゝる旅人に、外套をぬがせたる方力勝れりと定めんと、北風まづ術を施して、寒くはげしく暴風を起せば、旅人はかたく外套をおさへ吹飛されじと身にまとへり、其時日輪出で赫々たる光

を放ち霧を拂ひ寒さを除けば、旅人は暖氣を愉快とし、外套を脱ぎたれば、そこで日輪の方勝たり、暴を以て事を遂んよりは、徳を以て人を伏せしむべし、

●寡婦と幼婢の話

或る儉約い寡婦二人の下女を仕ひ居たるに、早起はなんでも益があると、毎暁一番鶏が鳴くと自分が先に起きて、下女を呼醒すゆゑ、下女ぞもつらき事に思つて、畢竟彼鶏が早くから鳴くからたと、或日兩人相談して雄鶏を縊殺し、其晩から寡婦は時間を知らぬ顔をして居ると、

取違ひ、平常より早く起きて下女を呼醒しましたが、餘り狡猾に働きすぎると、智惠まけがして、此の下女の如きものであります、

●一双の壺の話

或る河に一双の壺流れ下る、其一ツは陶器にて他の一ツは黄銅なり、黄鍮は後より聲をかけ「オイ一寸御待なさい、同伴に參りましやう、成た け側へ御出なさい」と いへば、陶器「オイ懇願たから私に近よつて下さるな、私は汝に一寸でも觸られちや、直に粉微塵になつてしまひますから、私には一番禁物で御坐ります」と申しましたが、

餘り強いものと弱いものとは、親友が出來ぬものであります、

●天文學者の話

或る天文學者が星を見ながら徘徊癖ありしが、或晩のこと例の通り星のキラ〳〵したるに見とれて仰向てあるく内に溝の中へ落ちたり、そこで上らんとすれども向脛をくじきたるゆゑ、どうしても上る事が出來ず、只溝の中から首を出して哭喚し頻りに助を呼たれば、近所の者が駈附けて來て引上たうへ、近所の者が云へる樣、先生天文を

視る御勉強はよろしいが、足下にある世の中のものにも御氣をおつけなさい、如何に學者でも世の中の事に構はぬでは、世渡りは六ケ敷いと云はれました、

●老婦と空壜の話

好い香のする銘酒を入れてありし所の壜が、最早中の酒は飲み盡して空になりしかば、店の隅へころがして置くと、其處へ來る所の老婦が、その香の好きに堪りかねて、壜を取て鼻へ推當て勢一ぱいに嗅ぎ居たりしが、餘りの事に聲を立て「オーこの入物でさへ好い香がするところを

見れば如何にいゝ酒が入れてあつたらう」と申されましたが、人も之と同じく生きてる時に功業があれば死したる後までも、芳名を殘すものでありまず、

●獵師と漁師の話

或る獵師が獲を澤山得て犬をつれて歸る途中に、漁師が魚を澤山入れた魚籃を提げて我家へ急ぐにゆきあつたり、其時獵師は魚の料理を食べたいと思ひ、漁師は獸肉の好いのを食べんと思ひ、双方相談して互に獲を交換せんとして云ふやう、汝の獲と我の獲とは同じ時間を費した

ものゆゑこのまゝ交換し、明日も此處へ落合ひ今日の如く交換しやうと云合へり、さて夫より後は兩人とも毎日食料を取換て食たりけるが、或人がこの有樣を見て「彼輩はあんなに同樣な交換はして居ても、今に口が慣て自分の物が、食たくなるたらう」と申されましたが、兎角人の物は好さゝうに見ゆるものだが、慣ると矢張かわつた事はないものであります、

老婆と醫者の話

或る獨居の老婆が眼病にて眼が見えなくなりたり、そこで竹庵といふ庸醫を賴んで治術を乞へ

り、此醫者格別上手ではあらざれども、さりとて又下手と云ふ程でもなければ、老婆は証人を立て、私の眼が見える樣になれば、立派に御禮を致しますし、若し治りませんければ、何も御禮は致しませんと云ひけり、さて醫者は毎日々々老婆の療治をしましたが、來る度毎に何でも目に觸れる老婆の道具を盜みては歸りましたが、諸道具が盡く紛失したるゆゑ、不思議に思ひ、必定庸醫の擧動なりと思へば、それなり藥禮もなさゞりけり、夫故醫者は毎日藥禮の催促をしますけれど

も、一向搆付けずに只言譯ばかりして居たりしが、醫者は遂に堪へかねて、或日裁判所へ訴へ出たり、やがて老婆は裁判所へ呼出されたる時云ふやう、唯今原告が眞實らしい事を申せど、被告は治療を受ける前に、盲目が治つて明るくなれば立派に御禮をします、さもなき時は何も禮を致しませんと約束しました、そこで今原告が私を治したと申されますが、私は決して治らぬと思ひます、なぜなれば家の內の諸道具や品々が眼に見えましたが、今度治つたと申されましても、私の眼には家の內の品物が何一つ見え

ません、是では禮が拂はれますものかと申述たり、世の中で小黠をすると又大黠ものに謀られます、

●田舍娘と牛乳壺の話

或る田舍娘が頭上へ牛乳壺を載せて歩きながら、彼是種々考へました「この牛乳を賣て鷄卵が三百買る、その中五十惡いのがあるとして、殘りの王子を孵せば、二百五十羽の雛が出來る、その雛が生長してから、安く見積つても一羽二十錢位に賣るとすれば、悉皆賣つて五十圓になるから、大層なお金が私の懷中に入る、さうすれば

新しい美しい衣服を着る事が出來ませう、それを考へて見ませう、青がよからう、青は顏色を白く見せるから、而して其衣服を着て、市街へ出て自慢してやりませう」と、頻りに考へてゐる内に、牛乳壺がひつくりかへり、忽ち片々に碎けましたから、今まで考へた事が、暫時に皆むだになつて仕舞ました から、なんでも外へ氣を移さずに、一心に仕事をするが善きことであります、

漁人水を敲く話

或る漁人魚を捕らんと小河に行き、竪網を流に

横へ張渡して其の網へ魚を追込まんと、頻りに長き竹竿にて網の兩方より水を敲いて居まする と、近所の人が大勢駈け來り「モシ汝さんそんなに水を敲いては困りますから」と言ひければ、漁人「諸君に御氣の毒では ますが、斯樣に致すので、私は命をつなぐ御座りますから」と申されましたが、世の中の事は いで居ります」と申されましたが、世の中の事は 仲々六ヶ敷いもので、自分には能くても、他人 に悪くては何にもならぬものであります、

人殺者の話

或る悪漢が人を殺して、其子や親類に追かけら

れ一生けんめいに逃げて河の岸まで來ると、僧の方から大きな獅子が口を開いて喰はんとした故に前に逃げやうとするに、橋もなく船もあらざれば、途方にくれてかたわらの大樹に逃登ると、その枝に大蛇が絡りてゐて、只一呑にせんとしけり、そこで人殺者が又驚き河の中へ跳込んでにげんとするとき、水中に鰐がすむでゐて、只一噬にかみ殺しました、それたから悪事をした者は、天地にも水火にも身のかくし所がない譯であります、

養老の瀑の話

美濃國當者郡の樵夫某は、至つて孝行の者なるが、家は甚だ貧しけるゆゑ、某は薪を賣つて能く父を養ひ居たり、其父は酒を好みますから、樵夫は常に酒を買つて飲ませます、或日山に入りて誤て石につまづき仆れ、不圖傍を見ると酒氣あるを覺え、不思議に思つて試みに之を嘗むれば其味酒の如し、某は大に歡び毎日汲んで父に飲ませましたが、靈龜三年九月元正天皇美濃に幸し其泉を養老の瀑と號けました、

一休和尚餅壺を破碎したる話

一休和尚十二歳のとき師匠の許にありしが、師

匠は一箇の飴壺を秘蔵しけるが、折々之を出して自分獨り旨さうに食べ居たり、此の時一休は何卒食べたいものたと思ひ、懇願少々下さいと云ひければ、師匠たまして曰く、此の飴は小兒には大毒ですから、汝が之を食べればぢきに死にますと申されたり、或日師匠親類へ行き留守になりければ、一休は例の飴壺を出して中の飴を食ひ盡したり、少時して師匠の歸る時刻を見計ひ、飴壺を破碎し置きてワイ〳〵泣き居たり、折ふし師匠歸り來り、此の有樣を見て大に驚き、汝は如何したのたと問ひけるに、一休答へて云

ふやう、今日御不在中掃除するとて、兼て御秘藏の飴壺を破碎せしゆゑ、申譯なく、生きては居られぬと存じ、先日承はりましたには、あの飴を小兒が食すれば死ぬと仰せられましたから、一口食べましたが一向死なず、二三杯つゞけて食べましたが遂に死にませんゆゑ、悉皆食ひ盡し今將に死なんとして居る所なりと申されしかは、師匠も前に虛言をいひし事を後悔し、何も言ひ得ずして止みたり、

司馬溫公小兒を救ふたる話

宋の司馬溫公七歳のとき、數多の小兒と共に水

甕の邊りに遊び居りしが、一童甕に登り足を踏みはづして水の中に落ちたりしかば、衆童これを見て大に驚き、家に歸りて父母に告ぐる者あり、或は市中に走り救ひを呼ぶものありて、其騒ぎ一方ならざりき、然るに温公は獨り思ふやう、如何に甕の價貴しと雖も、人命には代へがたしと、傍の石を持ち甕を撃つて破りければ、水迸しり小兒は安全に出づることを得たりと云ふ、

●手眞似の話

此話は英國オクスフオード大學校にて實際あり

し事柄なりと言傳へり、その國の語學博士曾て龍動に滯留し居たるが、我れ此英國に來るからは、何とぞ我が是迄學び得たる各國の言葉にて、當國の有名なる學者と談話を試み度き者なりと思ひ居る中、終にオクスフオード大學校の教師の一人と面談するを得たり、扨オクスフオード大學校の教師は前以て彼の博士の來訪する期日及び樣子をも知りたるゆゑ、こは一番博士を驚かし遣らん者と思ひ、頓て數人の書生に農夫の如き裝束をさせ、之に教ふる樣「汝等是より博士の來る可き道筋に出で適宜の距離を計りて、其

所此所に控へ居り、博士が何か汝等に問掛たらは、甲は拉丁語乙は希臘語丙は希伯來語、丁は日耳曼語戊は佛國語巳は伊太利語と各々異國の言葉にて返答せよ、若しまた先より何も問掛けぬ時は、此方より右の異國語にて、何なりと然る可き事を問掛く可し」と、夫々手筈を傳へて其を使ふに驚き」はてな何でも是はいはれある人が

件の博士はオクスフオードへ如何程あると問たるに、今度の農夫は立派な拉丁語で返事をしたれば、博士の驚き想ひ遣る可し、博士は是より段々と零落て農夫となりし者ならんと心に思ひながら、猶進み行く中にも怪しむ心の止まざれば、外の農夫に問試みんと思ひ、次に出會たる農夫に是からオクスフオードへ如何程あると問たるに、

ふろく

彼の書生中の一人に佛國語にて「もう何時で御座いましやう」と問を掛られたれど、農夫が能く佛國語にて「もう何時で御座いましやう」と問を掛られたれば、直に返答は仕たれど、農夫が能く佛國語オクスフオードに近づく道筋にて、古今各國の種々の語にて問はれ、或は答へられしにぞ、博士は實に此上驚き様のない程にまで打驚きたり、聽て博士は教師の許に着き、教師に云へる様「當學校の薫陶は既に路上の芻卒にまで及べり、實

に校員の智識上達せるは我れ充分に見届たり、左るにても當校に充分手眞似のみにて能く分る樣に對談し得る者之れあるや承はり度し」と問はれて、教師は暫らく考へ「一人之あり、足下若し我と共に食事に就き玉はゞ、御面會致させ申さん」と答ふれば、博士は之を承諾せしにぞ、教師は暫時の暇を乞ふて、其室を立出で相談の爲め、同僚の許に到り「彼の片目のジョージと云へる呆漢を生徒の姿に打扮せ、之を博士に面會させなば、至極面白からんと云へば、同僚も亦は面白き考へなりとて、相

談頓に決したるが、抑も此のジョージと云へるは頗る愚物にして、且一目は失明れ居り、是まで此學校にて、常に人々の翫弄と成り居たる漢なり、教師は既に食事を終へ、ジョージを呼びて云ふやう「或る紳士兼て汝の樣子を聞き及び是非面會を仕度とて、我まで申越せしゆゑ、汝は明朝十時頃某所にて面會せよ、左れども件の紳士と云ふは、聾にして少しも他人の音聲通せされば、汝能く注意して少しも言葉を使ふ可からず、手眞似のみにて應接せよ」と聞てジョージは早速承知し」仰せの通り明日は定めの席へ參る

「可し」との答へを聞き、教師は又初の座敷に歸り行つ、博士に向ひて「明日の午前十時に御面會致す都合に爲し置けり」と云へば、博士は困りし體にて「开は何よりの遺憾なり、明日十時に迎ひの馬車を此處へ寄越せと命じ置きたり、左れども少しの間ならば、迎ひも猶豫す可ければ、暫時なりとも面談せん」と答へたり、博士は翌日十時少し前に約束の塲所へ行き見れば、ジヨージは既に其所に待居たり、博士もジヨージも共に數分間は沈默して居たりしが、博士は頓て一本の指を突と上たり、ジヨージ之を見て直ちに二

の指を上ければ、博士は微笑て三本の指を上ぐ、ジヨージ之を見て固く拳を握りて振揚たり、博士は此時時計を取出し、周章て其席を立出で、出立刻限の少し過たるを見、元居し室へ歸り來て、其戸口に待居たる馬車に乘ながら云ひけるは「ジヨージは拙者の思ふたよりも餘程手眞似に巧なり、初め拙者は暫く彼から話し掛て來るを待居たるに、彼は敢て話し掛けざりしゆゑ、拙者先づ宇宙に一つの神ありとの事を、一本の指にて示したるに、彼は直ちに二本の指を出し、神には神父神子の二體ありと答へたるゆゑ、拙

者また三本の指を出し、神父神子聖靈の三體あ
りと示したるに、彼は更に握り拳を出して、成
る程三體なる時合して、一體となれる者なりと
の意を示したり、此時拙者は既に時刻の遲れた
るを見たれば、早速分れ來たるなり、拙者は實
に彼の上達に感心したれば、何とぞ拙者が感心
の旨を、彼にお傳へ下され度し」と言葉を殘して
立去たり、博士が門を出ると間もなく片目の
ジョージは息咳切つて走り來り「巳を馬鹿にして
失敬な野郎、博士は何處へ行つた」と云ふゆゑ、
教師は「何事なるや」と打問へば、ジョージ答へて

云へる樣「お聞き下さい斯ですよ、彼奴は室へ入
來り席に就きて暫らく私の顏を眺め居り即てお
前は片目だとて一本の指を示せし故、少し癪に
障りたれど、先づ堪忍して二本の指を出し、君
には兩目ありと挨拶したるに、彼は又た三本の
指を出し、兩人の中に僅か三個の目ありとの意
を示せし故、我堪え兼て拳を握りたり、其時彼
は室を逃出したれど、若し彼れ逃出さずに居た
らば、好加減に我が拳固を受る所にてありき」と
語れりとぞ、此話は爾後幾度か聽者を面白がら
せたり、しかし其事は餘程昔しに在りしならん、

●父の罪に代らんとする話

明治六年の頃、岩見國安濃郡川合村に善一郎といふあり、已が名に似ず何か惡きことありしと見え懲役に處刑せられたり、其子に安吉と云へるありて歳僅かに十才なりけるが、父の處刑になりしを深く歎き悲しみ縣廳に至りて泣いて身を以て父に代らんことを願ひ出でけり、されど法律の許さぬことなれば、役人も涕をかくして厚く説諭して歸しけるとぞ、

少年教育 **修身はなし附錄** 終

明治四十四年三月七日印刷
明治四十四年三月十三日發行

不許復製

編輯者 東京市淺草區北元町十二番地 鈴木源四郎
發行者 東京市淺草區三好町七番地 大川錠吉
印刷者 東京市淺草區南元町廿六番地 川崎清三
印刷所 同所 大川屋印刷所

發行所 東京市淺草區三好町七番地 聚榮堂大川屋書店
（電話下谷一五七三番）

MADE IN JAPAN,

265
711

東京
聚榮堂
發行